
またまた護衛連隊第7小隊 - S T A N D A B L A Z E -

降下猟兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またまた護衛連隊第7小隊 - STAND ABLAZE -

【Nコード】

N5908G

【作者名】

降下猟兵

【あらすじ】

第7小隊に課せられた次なる任務は・・・山賊退治。紆余曲折を経て峠に辿り着く小隊、その時二トは・・・。

第1部

Leibstandarten SIEBENTZUG

- またまた 護衛連隊 第7小隊 -

STAND ABLAZE

前回の任務以降、すっかり大トカゲは現れなくなり、ヴォルスト
ブッフの都にもいつもの平和な日常が戻ってきた。

第7小隊の連中は相変わらず任務から干され、訓練という名の昼
寝と、演習という名のハイキングを繰り返すだけの、

無為で怠惰な日々を送っていた。

つまり、前回の任務で彼等は、事態の収束という当初の計画を達
成してはみたものの、未だに上層部からの絶対的な

信頼は得られてはならず、待遇は全く改善されないままだったの
だった。

その日もヴィリー、ニート、アイヒの3人は、中央区域の一角に
あるただっ広い公園の中にある芝生に寝転んで

無意味な“訓練”を満喫している。

そこへ連隊本部へ呼び出されていたタウが歩いて戻ってきた。

「みんな起きろ、訓練は中止だ。新しい任務に出かけるぞ」

「何？任務だって？」

ヴィリーは芝生に転がったまま起き上がろうともせず、顔だけを

タウに向ける。

目は半開きのまま、見るからにやる気が感じられない。

「トカゲの次は何だ、トカゲロンか？、ヒトカゲか？、それともモグラか？」

「えゝ？モグラ？」

モグラと聞いて、両手を後ろについて上体を起こしたニートが、眉をひそめて嫌悪感を露わにする。

「いやよモグラなんて。断つてよ、そんな任務」

「モグラなんて一言も言っていないだろ、いいから起きて話を聞け。いや、アイヒは起こさんでいい、どうせ聞いても分からんだろうから」

「またトカゲ退治なんていやよ、絶対」

芝生に腰を下ろしたタウに向かってニートが言う。

「いや、トカゲじゃあない、もっと手強いやつだ」

「まさか、ドラゴン！？」

「またかよ！」

ニートとヴィリーの脳裏に前回の出来事が蘇る。

「いやいや、ドラゴンでもない。今度は人間だ」

「人間？」

「そう、山賊だ」

「山賊！？」

「もう、いい加減にしてよ。あたし達の任務って何でいつもそうなのよ」

ニートは、またしても本来の任務である王室の護衛とかけ離れた任務に落胆し、ふて腐れた。

「まあそう腐るな、ニート。」

今の俺達にとって一番大事なのは、与えられた任務を確実にこなし続ける事だ。

本来の任務に近付くための近道は他にないんだ」

「わかったわよ。で、何すればいいの？」

「このヴォルストブッフから、トレーデリヒ街道を通って南に真っ直ぐ行くとムレーネ海に出る。」

そのムレーネ海に面したホファート子爵領と、その北側のブレートマン男爵領の、ちょうど境界線を東西に山地が走っている。

山地は両貴族領の東側に広がっているのだが、この境界線の部分だけが天狗の鼻のように平地に突き出た形になっている。

その鼻の付け根あたりをトレーデリヒ街道が通っていて、ドロツセル峠と呼ばれている。

そこに山賊が出るんだ」

「天狗の鼻・・・付け根・・・、鼻の穴？ 山賊は天狗なのか？」

「バカ！ 喩え話でしょうが！」

「知つての通り、トレーデリヒ街道はヴォルストブッフとムレーネ海を結ぶ重要な幹線路だ。」

ムレーネ海からホファート子爵領の港に揚がる海産物や外国の品物は、全てこのトレーデリヒ街道を通って

ヴォルストブッフの都へもたらされている。

しかしドロツセル峠に山賊が出没するようになってから、商人達は山地を一週間以上もかけて迂回しなければならなくなった。

峠を通れば一日足らずのところをだ。

資金力のある商人は、傭兵を雇って護衛させて峠を通行しているが、その分の人件費は商品に上乗せされてしまう

ため、都の商人は仕入れの段階で既に高い値をつけられ、住民は更に高い値で商品を買わされる羽目になる。

そこで、都の住人や小売り商等の組合からの陳情を受けた国王陛下が、ホファート子爵、ブレートマン男爵両氏に

山賊の討伐を要請したのだが、両貴族はそれぞれあの山地は自分の領地ではないと主張し、山賊退治に消極的な態度

を示した・・・」

「なんで？ 山賊が出て困るのは自分達でしょ」

ニートが不思議そうな顔をする。

「俺も同じ質問をした。」

しかしどちらの貴族も山賊から直接被害を受けている訳ではない。

被害を被っているのは峠を利用する商人や旅人などの通行人だ。これは連隊長の言葉だから俺は詳しくは知らんがな」

「そこでオレ達の出番ってワケか」

そう言ったのはヴィリー。

その言葉からいつものヴィリーらしい澁刺とした活気が感じられない。

「まあな、だが今回は俺達だけで行動するのではない。」

ブレートマン男爵家の騎士団と共同で討伐に当たる」

「何！？」

「まあ、説明は追々することにして、すぐに出発するぞ。」

みんな一旦家に帰って、支度を調べてまた集合しろ、長旅になるぞ」

旅支度を終えたニートが集合場所の第三城壁の南門へ行くと、既にタウとヴィリーが待っていた。

そのタウの後ろには一頭の馬と馬車が・・・。

「そ、それに乗って行くの？」

「ああ、そうだ」

「それってただの荷馬車じゃないの！ いやよそんなの、おしりが痛くなっちゃう」

「文句を言うな、予算がないんだ。歩かないだけかもしれません」
「まったくだ、てめえのデカイケツなら座布団もいらねえだろうに、わがまま言うんじゃない」

「マジでブツ殺すわよ、ヴィリー」

「まあ、どうしても嫌だと言うんなら別の馬車を借りるが、そうになると何日か食事を抜かなきゃならんぞ。

なにせ予算の半分はお前の食費なんだからな」

「あんたのそういうものの言い方って大っ嫌い！」

「へへ、どうすんだ？、この大飯喰らいが（笑）」

「うるさい！ダメに決まってるじゃない！（赤）」

そこへアイヒが登場。

「すいませ〜ん、遅れました」

「あんたその格好は何？」

ニートはアイヒのいでたちを醒めた目で見る。アイヒはフリフ

リのワンピースに麦わら帽子、完全に旅行気分だ。

「旅行じゃないって言ったでしょ！」

「あれ？ そうでした？ だってニートさん海へ行くって・・・」
キョトンとするアイヒ。

「海へ行くなんて言っていない！ 海の方へ行くって言ったのよ！」

「まあいいじゃないかニート、後で着替えればいい」

「何言ってるのタウ、隊長のあんたがそういう態度だから、みんないい加減でまもらないんでしょ」

「そう言うな、俺は規則でガチガチってのはあまり好きじゃないんだ」

「そうだぞニート、アイヒだって悪気があったわけじゃねーんだし、もっと生暖かい目でみてやれ」

「生暖かいって何だ！ 使い方が違うだろ！」

「とにかく乗れ。急がないと、山賊は待ってくれんだ」
そう言いながらタウは馬車の御者席に座る。

続いて後ろの荷台に乗ったヴィリーがアイヒの手を取り、かけ声と共に引き上げる。

「いよっ！」

「ありがとうございます」

その時、ヴィリーは荷台に上がって礼を言うアイヒの背中 of 真新しいバッグに目が留まった。

「お、アイヒ、新しいバッグか？」

「ハイ！」

嬉しそうにニコニコ笑うアイヒの後ろから、荷台に上がったニートが自慢げに言う。

「あたしが買ってあげたのよ、どう？似合うでしょ」

「わたしは隣りのお店のウサギさんバッグの方が良かったです」
「何言ってるの、ブッチよブッチ、外国製よ、高かったのよ！」

いつまでもあんな子供じみたのばかり欲しがるんじゃないの」

「えゝ、でも・・・」

ヴィリーは、ふと、ある事に気が付いた。

「あれ？、これブッチじゃねえぞ」

「はあ！？ 何言ってるのかなこのバカは。 あんたにブランドの何が分かるっての！（怒）」

ヴィリーにいちやもんを付けられたニートはちよつと立腹。

「うるせー、よく見てみる、このタグ、“BUCCI”じゃなくて“BOCCI”になってるぜ」

「え？、ボ、ボッチ！？・・・、じ、じゃあ・・・ニセモノ・・・？（汗）」 ガーン！

タグの文字を見ながら愕然とし青ざめるニート。

「うえゝん、ニセモノつかまされたあゝ（涙）」 ベソをかくアイヒ。

「あんたが言うな！ それじゃまるであたしがニセモノ売ったみたいじゃない！」

「売ったのか？」

「売るか！」

荷馬車は走るよコトコトと・・・。

かくしてヴォルストブツフを旅立った一行は、プレートマン男爵領を目指し、一路南へ向かってなだらかな丘陵地帯を進んでいた。

道はいつしか石畳の舗装もなくなり、都から大分離れたことを知らしめているが、さすがに大道は道幅も広く、路面も綺麗で安定していて、行き交う馬車や人々の数も多い。

ニートが発前の話の続きを聞く。

「ねえタウ、男爵家の騎士団と共同で山賊退治って言ったわよね」
御者席で手綱を握りながら、後ろへ顔を振り向けてタウが答える。
「ああそうだ、これには色々と事情があつてな」

「何だよその事情ってのは」

荷台でニートと向かい合うように座っているヴィリーも、この件には興味があるようだ。

「山賊のいるドロツセル峠は、ホファート子爵もプレートマン男爵も共に自分の領地ではないと主張している。」

しかし元来はどちらかの領地であつたはずだ。

主要街道が途中で領有権のない土地を通るなんて保安上あり得ないだろ、普通」

「つまりどつちか嘘をついてるわけね」

「まあな、だが政治的なことは俺達にはどうでもいい。」

連隊長の話によると、その件について国王陛下のご裁可があった。

つまり、新たにその山地をプレートマン男爵領と認め、関所を設け通行税を徴収する権利を与える代わりに山賊を討伐せよというものだ。

一方プレートマン男爵といえば、男爵は経済的に裕福とはいえず、山賊討伐のために必要な兵力を集められない

ため、国王陛下に国防軍の派遣を要請した、という訳だ」

「じゃあ何であたし達なの？ 国防軍を出せばいいじゃない」

「戦争でもないのに国防軍は出せんだろう。」

それにお前とヴィリーは護衛連隊に入る前に山賊退治に参加したことがあるんじゃないのか？」

「ああ、ニートは知らんが、オレはあるぜ。ボッコボコにしてやったっけなあ・・・」

「あたしもあるけど、一度だけよ。何で知ってるの？」

「一度でも、ないよりましだ。護衛連隊で山賊退治の経験があるのは地方兵出身のお前等ぐらいのものだ。」

山賊退治は地方兵にとっては重要な任務の一つだからな」

「なるほど、それでオレ達に出番が回ってきたってわけか」

「そういう事だ、男爵も直属の騎士団を派遣するから、共同で作戦を行う」

「共同作戦なんて、めんどくさそう・・・」

いつになく消極的な態度をみせるニートをタウは不審に思った。

「なんだ、お前にしては随分投げやりだな」

「まあね・・・、護衛連隊に入ってまで山賊退治なんて、考えてもみなかったわ・・・」

そう言っただけで荷台の側面板に肘をつき、手に顎を乗せて景色を眺めるニートの表情は、明らかにいつもの彼女と違っていて、どこことなく沈んでいるように見えた。

説明しよう。

ゾルクローヌ王国には、正規軍として国防軍と近衛連隊が存在する。

護衛連隊もその運用に国費が支出されているため正規軍として扱われるが、どちらかというと国王の私兵と見なす

傾向が強く、特に貴族達の大多数はそういう見方をしているようだ。

なにより護衛連隊は、国王の勅命によってのみ行動する事を認められている部隊なのだから。

国防軍はその名の通り他国との戦争の為の組織で、王都ヴォルストブツフの他、国内の数ヶ所に駐屯地を有し、

それぞれ作戦本部と関連施設の他、演習地等を所有しており、その全てが国有地、つまり直轄地である。

また、国防軍の下部組織として、国境周辺に展開している辺境守備隊があるが、その運用費は国境に面した当該地方

領主が負担しているため、他の地方領主が私有する領兵と同様、非正規軍として扱われている。

辺境守備隊出身のヴィリー、領兵出身のニートは共に、非正規の地方兵から護衛連隊入りを果たした非常に珍しい

存在となっている。

「じゃあさ、何でホファート子爵に山賊退治させないのかな？」

「それこそ政治的問題というやつだ、俺に聞かれても分からん」

「そんなにブツブツ文句ばかり言うんじゃないぞ、ニート。」

山賊退治なんて、アイヒの魔術で山ごと吹っ飛ばしちまえば一発で終わっちまうだろ。 楽なもんだぜ」

ニートの向かいでふんぞり返るヴィリーが手振りを交えてへらへらしながら言う。

だがタウから返ってきた言葉は、ヴィリーの考えとは正反対のものであった。

「そうはいかんぞヴィリー、今後アイヒにあの手攻撃魔術は使わせん」

「なんでだ？ どうしてなんだよ」

驚いたヴィリーは身を乗り出すようにしてタウにその真意を聞く。

「いいか、護衛連隊の各小隊に1名ずつ配属されている魔術師の基本的な役割は防御とケガ人の応急治療にある。

アイヒは其中でも突出して強力な破壊系魔術を持っているが、それは本来のアイヒの仕事には不要なものだ。

それにその手の魔術は大きく精神力を消費するんだ。 本来の任務に差し障りがあつては元も子もない」

「じゃあ、もうアイヒには全然攻撃魔法を使わせないってのか？」

「時と場合によつては使うこともあるだろうが・・・、山を潰すような強力な術は二度とごめんだ。

あれではこっちの身まで危うくなる。

もつとも、アイヒ自身があの術を自由に操れる程に熟達しているとも思えんがな」

そう言つと、タウは荷台で横になつて眠るアイヒを見る。

「なんだ、つまんねえ・・・」

がっかりしたヴィリーは頭の後ろで手を組み、再び荷台にふんぞり返つた。

その様子を見ていたニートがヴィリーに向かって言う。

「そういうあんたもいつものバカらしくないわね、いつもならもつとギャーギャー大声でわめきたてるのに」

「うるせーぞてめー、だいたいオレのハーレム計画に山賊退治は入つてねーんだよ」

「あ、そう・・・」

納得するニート。 < やつぱりバカなんだこいつ >

「ハーレム計画か・・・、じゃあブレートマン男爵家に年頃の令

嬢がいたとしても、計画には入らんのかな？」

「なに！？」

いきなりガバツと身を起こすヴィリー。

「それは本当か！タウ！！ 何でそんな大事な事を先に言わん！
そうと分かればぐずぐずしておれん！ もつと急げんのか！」

「誰も令嬢がいるとは言ってないだろ、いるかも知れんという仮定の話だ。 早合点するな」

「なに？ いないのか！」

「どうだろう、そればかりは行ってみないと分からんな・・・。
だがこれで少しはやる気が出たろ」

「おうよ！ なんか急に腹減ってきたな、飯にしようぜ」

「現金なやつだな・・・」

荷馬車は走るよコトコトと・・・。

その後4日ほどは、天候にも恵まれたせいもあつて何事もなく平穩に経過した。

彼等の行方に暗雲が垂れ込め始めたのはその翌日、グライスナー伯爵領へ入る関所に於いてであつた。

そこは武装した兵士が数人、鉄板で補強された頑強な門扉の前で、そこを通る人々の通行証や手形を確認する作業を

行っていて、既に商人の馬車や旅人などが5、6人列を成していた。

タウはその最後尾について馬車を止める。

荷台で寝ていたヴィリーが、馬車が止まったのに気がついて目を覚ました。

「なんだ？ 着いたのか・・・？」

「いや、関所だ。すぐに済む」

「関所？」

「そうだ、ここから先はグライスナー伯爵の領地に入る・・・と、この地図には書いてある」

タウは持参した地図を広げて眺めながら言う。

「ちえっ、めんどくせえの」

そう言つてつまらなそうな顔をするヴィリーをニートがからかう。

「だったら強行突破すれば？ 有名になれるかもよ」

「おっ、それおもしれーな、いっちょやったるか」

「バカなことを言うな、こんな所で騒ぎを起こしてなんになる」

待つこと数分、一行の乗る荷馬車に兵士の一人が近付いてきた。

「何者だお前ら、傭兵か？」

兵士はタウ等の出立ちを見て不審な顔をする。

一行は甲冑こそ装着していないが、肩や腕に金属の保護プレートを縫い付けた黒い連隊服を着ているため、どう控えめに

に見ても商人や一般の旅人とは思えないのだから、兵士が怪しむのも無理はない。

「我々は護衛連隊の者だ」

そう言いながらタウが懷から鑑札を取り出して兵士に手渡す。

「護衛？・・・ウツ！（汗）」

兵士は鑑札を見て驚き、たじろいだ。

それは王室発行の御印鑑札、天下御免のフリーパスだった。

通常、商人達が持つ鑑札というのは木製で、そこに所属するギルドの紋章や家紋が彫刻されたり刻印されたりしている

ものが普通だが、タウの差し出したそれは金属製の上、刻印は王家の紋章である驚とくれば驚くのも当然。

しかも、王室ゆかりの者が訪れる時は事前に通達があつて然るべきところを、何の連絡もなくいきなり現れたのだから

兵士の狼狽ぶりもタウには容易に理解出来た。

「ち、ちよつとそこで待て・・・いや、お待ち下さい（汗）」

そう言つて兵士は鑑札を手に、慌てて門の内側にある詰所に向かつて走つて行つた。

「なんだあいつ、焦つてやんの」

兵士の背中を見送りながらヴィリーが面白がる。

だが暫く待つても、さつきの兵士は詰所へ入つたままなかなか戻つて来ない。

その間も他の通行人達は、別の兵士が確認作業を済ませて次から次へと門の中へ入つて行く。

ヴィリーはイライラしながらその様子を眺めていた。

「くそー、いつまで待たせるんだ、あのヤロー」

それとは対照的にニートは落ち着き払っている。

「焦つてもしょうがないでしょ、大人しく待つてなさいよ」

「うるせー、黙つてろ」

「その貧乏揺すりやめなさいって」

「てめーに言われるとますます腹が立つ!」

「にしても遅いわね、どうなつてんの? タウ」

「俺に聞かれても分からん、もう少し待て」

「あの鑑札、ニセモノなんじゃない?」

「あれは連隊長から直接預かつた御印鑑札だぞ、そんなはずがあるか」

「もう辛抱たまらんぞ!」

遂にヴィリーは立ち上がつて、門の前で他の通行人の通行証を確認している兵士に向かつて大声を張り上げた。

「おい! そのの! てめーだ、おい! いつまで待たせるんだ、こら!」

さつさと通せ! このヤロー!」

タウが一喝する。

「やめろヴィリー、騒ぐな!」

ちょうどその時、詰所から先程の兵士ともう一人、どうやら門番隊の隊長らしき人物が現れ、一行の方へ向かって歩いて近付いてきた。

「やっと出てきやがった。おいこら！ちゃっちゃと通せ！」

「待たせたな、お前らが護衛連隊か」

その小太りで口ひげの隊長らしき男は、腰のベルトに手を掛けてやたら偉そうな態度でニヤけながら話す。

「おうよ、さっさと通しやがれ！」

「ここへ来た用件をお聞かせ願おうか」

「なに？」

「何しに来たと聞いている」

「なんだと、てめー！偉そうに！（怒）」

「よせヴィリー、お前は黙ってる」

握り締めた拳に力を入れるヴィリーの前に手を差し出して制止するタウを見て、門番隊長がタウに向かって話す。

「お前が隊長か？」

「タウゲニヒツ・ラングヴァイラー軍曹だ、だが我々の任務の内容を話すわけにはいかないな」

「何？」

「我々護衛連隊の任務は常に極秘というのが鉄則だ、必要な者は事前に通知されているから口外は一切無用だ」

「なんだと！」

ニヤけていた門番隊長の表情が一変した。

タウの冷静沈着、というかあまりに冷徹な物言いに、言いしれぬ緊張を感じ冷や汗を流した。

というより、王室直属を盾に慣例を無視するかのようなタウの態度を見て甚だ気分を害した、と言った方が正しい。

「そ、そうか・・・、どうあっても言えんと言っただな・・・（汗）」

「そうだ」

「・・・ならば致し方ない、我々としてはお前等をここから先に行かせる訳にはいかない、と結論せざるを得ないな」

「なんだと！」

それを聞いたヴィリーが荷台から身を乗り出して声を荒げる。

対して門番隊長も毅然とした態度で言葉を返す。

「それが我々の任務だ。」

如何なる理由があろうとも、何をしでかすか分からん者を我が領内に入れる事は許されん！」

「なんだと！このクソおやじ！」

じゃあ何か？ このオレたちが盗つ人にでも見えるってか！」

「そうは言わん、だが例え護衛連隊と言えども、我がグライスナ伯爵領内で身勝手に振る舞い、領内の治安を乱す

ような事をされては叶わんからな」

「てめー！言いたい放題言いやがって！（怒）」

「ならば目的を言え、さもないとここから一步も中へは入れんぞ」

「うるせー！　そこまで言うんなら力づくで入ってやるぜ！」

とうとうヴィリーは腰に下げた剣を抜いてしまった。　シャキン！
「殺すぞ、てめー！」

「き、貴様！（汗）」

門番隊長は1、2歩後退りした。

ヴィリーの迫力に押された・・・、のではなく「護衛連隊の剣士」という肩書に尻込みした。

いつしか不穏な空気を感じて集まっていた数人の門番の兵士達にも緊張が走った。

兵士達も剣に手をかけ身構える。

「やめろ、ヴィリー！」

タウがヴィリーの袖を引っ張って止めに入る。

「ここで問題を起こせば、間違いなくお前はクビだぞ」

「なんでだよ！」

「任務以外で軽々しく剣を抜くな、これは鉄則だ。

それとも、お前のハーレム計画に「貴族領の門番と悶着を起こして護衛連隊をクビになる」のは入っているとでも

言うのかな？」

「くっ……（汗）」

「ここは俺に任せろ、いいな」

ヴィリーは苦虫を噛み潰したような顔をしながら剣を納めた。
ハーレム計画は相当重要らしい。

タウは門番隊長に向かって言う。

「迷惑をかけたな、では我々はここで引き返すことにしよう」

「なに!!?」

これにはその場にいた全員が驚いた。

あまりに突然のことにヴィリーとニートも慌てて声を荒げる。

「何言ってたタウ！」

「そうよ、それでいいの？ せつかくここまで来たのに」

「いいから、お前等は黙ってろ」

タウは手綱を引いて今来た方へ馬の向きを変える。 ヒヒン（馬

の声）

そこへ門番隊長が恐る恐る声を掛ける。

彼はタウの意図を計りかねていた。

タウはいつも飄々としている、というか感情を表に出さず無表情で話すので、彼を知らない人にとってはその言葉を

額面通り受け取っていいものかどうか、判断するのが難しいのである。

「お、お前……に、任務を放棄するというのか……（汗）」

「貴殿には関係のないことだ」

そう言い残してタウは馬を歩かせ、荷馬車は何事もなかったかのようにその場を後にした。バシッ！ヒヒン（馬の声）

ヴィリーとニートには到底納得がいかない。

「おい！どういうことなんだ、タウ！　なんで戻らなきゃいけないんだ！」

あんなクソおやじの言いなりになることねえだろ！」

「そうよ、説明してよ」

「別に・・・、この道がだめなら他の道を通るだけのことだ」

「なに？」

「俺達はグライスナー伯爵領に用がある訳じゃないからな、ここを通っても目的地に辿り着ければそれでいいんだ」

「じゃあ都へ戻るわけじゃないのね」

「当たり前だ、まだ何もしてないのに戻れるか。」

この先に横道があっただろ、そこを通って伯爵領を迂回する」

「あんた、もしかして始めっからそのつもりだったの？」

「そうだ。」

それをヴィリーが横から余計な口を出すからややこしくなってしまうんじゃないか」

「オレのせいじゃねー！　あのクソ頑固おやじのせいだろーが！」

「あのおやじ・・・いや隊長は職務に忠実なだけだ。　何も悪い事はしていない」

「なんであんなヤツが忠実なんだよ！」

「そうだな・・・、少なくとも国王陛下には忠実ではないかも知れんな、御印鑑札を無視したんだからな。」

だが領主には忠実に従っているとみえる」

「何よそれ、どういう意味？」

「お前等は知らんかも知れんが・・・、以前、連隊長が言っていた事があった。」

元々、護衛連隊の発足には色々と問題があったようで、貴族の

中には国王陛下に向かって堂々と反対を訴えた者もいたんだそうだ。

それも一人や二人ではなかったらしい……。もしかしたらその貴族の一人がグライスナー伯爵だったのかも知れない。

そう考えると、あの門番隊長の態度も頷けるといふものだろ」

「そ……そうだったのか……」

「だから俺に任せておけて言ったのに……」

この時のタウの想像は間違っていない。

事実、護衛連隊の発足に際してグライスナー伯爵が反対派の一人に名を連ねていた事は、このゾルクローズ王国の貴族ならば皆知っていることである。

門番隊長は自分の領主であるグライスナー伯爵の意向に沿うであろう決断を下した。

つまり、タウが関所で任務の内容を話したところで何も変わらない、初めから結論ありきのいやがらせ的行為だったのである。

「だったら通り過ぎるだけだって言ってやったら良かったんじゃないの？」

「それでは困る。そんな事を言ったら通過した先の、別の貴族の所へ行くことが分かってしまうだろ」

「その何が悪いの？」

「目的地を明かすことは、任務の内容を明かすに等しい」

「でもブレートマン男爵のところへ行くとは限らないでしょ、それ以外の貴族領もあるんだから」

「それでもだ。」

貴族ってやつは面倒でな、そうになったら今度は貴族同士で勘ぐり合い、あらぬ噂を立てては話の種にして面白がり、

延いては争いの火種にも成り兼ねん。

俺達のせいで貴族間戦争なんか起こってみろ、斬首でも済まないぞ。

だから俺達は、任務のことは一切他言してはならないんだ」

荷馬車は走るよガタゴトと……。

幹線街道を外れて脇道へ入ったことで、路面は一気にその快適さを失った。

石ころだらけのデコボコ道・・・、荷馬車は石を踏んで跳ねたり窪みに落ちたりして、始終ガタガタ揺れている。

下手に喋ったり欠伸をしていると舌を噛んでしまう恐れもある程に荒れている。

この状況ではさすがのアイヒも眠れない。

先程からアイヒは眠そうな目を半開きにして、膨れっ面で頬に手をつき横の景色を眺めている。

珍しく相当機嫌が悪そうだ。

ヴィリーもニートも気を遣ってか、一言も口を利かずに黙ったまま、ただ荷馬車の揺れに身を任せていた。

次第に人気もなくなり、景色も開けた田園風景から木々に覆われた林に変わり、それが森へ、そして山の中へと、

徐々に暗い方へ暗い方へと移っていく。

まるで彼等の気分をそのまま反映させているかのように。

山の中に入って暫くすると、どこからともなく一羽の小鳥が突然アイヒの頭の上に舞い降りた。 チュンチュン

頭上でピーチク鳴きながらピョンピョン跳ね回る小鳥に気付いた

アイヒは、やっとその大きな目をパッチリ開いた。

その光景を見て驚いたヴィリーとニートも無言で目をパチクリさせる。

だがそんな2人を余所に、アイヒは平然として左手を軽く上げると、小鳥は何の躊躇もなくその甲に跳び乗った。

思わずヴィリーが声を出す。

「アイヒ、そいつを捕まえろ、焼き鳥にして食おうぜ」

「ダメです、小鳥さんは食べません！」

小鳥はアイヒの手の上で、跳ね回ったり毛繕いをしたり、リラックスしまくっている。

それを見つめるアイヒの顔に、ようやく笑みが戻ってきた。

なぜかアイヒは動物に好かれる気質がある、それは野生の動物といえども例外ではない。

田舎の山育ちということも一つの要因なのかもしれないが、正確なところは誰にも分からない。

ニートが静かに尋ねる。

「ねえアイヒ、あんたってなんでそんなに動物に好かれんの？」

「わかりません、動物さんが寄ってくるんです」

「だからそれがなんでって聞いているのよ。」

都にいる時だって、よく野良猫があんたの後ろをくつついて歩いてたことがあったじゃない」

「それは猫さんに聞いてください」 ニコニコしながらきっぱり答えるアイヒ。

「聞けるかつつの！」

それを聞いていたヴィリーが茶々を入れる。

「なんか美味そうないでもするんじゃないのか」

「そうかな・・・」 ニートはアイヒに顔を寄せ、鼻をクンクンする。

「や、やめてくださいニートさん、お饅頭なんか食べてません」

笑顔でこそばゆそうに肩をすくめるアイヒ。

「いつの間にそんなの食べたの!? 別に、なんにも匂わないけど・・・」 ニートは不思議そうな顔をする。

「ハハハ・・・そりゃそうさ」

そう答えたのは御者席で手綱を握るタウ。

「人間の嗅覚なんてたかが知れてる。動物の方が遙かに優れているんだよ。」

アイヒの場合それだけじゃないんだろうが、なんにしても、動物に好かれるのはいいことだ」

そんなアイヒの気質が本格的に発揮されたのは、その3日後のことだった。

一行は幾つもの山を越え、幾つもの村落を通り過ぎてもなお、トレーデリヒ街道に合流出来ずにいる。

さすがに3日もデコボコ道を揺られ続けていると、いい加減みんなうんざりして嫌気が差していた。

本来ならば、ヴィリーとニートが大ゲンカをしても何の不思議もないが、この任務自体に乗り気でないニートが

ヴィリーの愚痴やら不平やらに全くと言っていい程反応しないせいで、喧嘩らしい喧嘩もしないまま、ヴィリーは

ひたすらストレスの捌け口を求めている。

時間は夕刻、もうすぐ日が暮れる。

タウは馬を急がせた。

馬も疲れていたが、それでもその歩みを止めさせる訳にはいかなかった。

彼の計算では、今日中にあと一つ峠を越えれば、明日にはトレーデリヒ街道へ合流出来るはずだ。

それまで後ろの荷台にいる連中の、特にヴィリーの暴発を抑えられるかどうか、それだけが心配だった。

その時、道端を歩く一人の地元民とすれ違った。

「あー、あの、あんな方旅の人かね」

その人は初老の、山で一仕事終えて家へ帰る途中の樵のようだった。

「今から峠を越えなさるつもりかね」

「そうだが、何か」

タウは馬を止めた。 ヒヒン

「あーそりやだめだ、悪いこたあ言わねえ、そればかりは止めれって」

それに対してヴィリーが不機嫌そうな目つきで、喧嘩腰に言う。

「なんでだよ、じいさん」

「この山は夜になると狼に占領されるだ。

そりやあ凶暴な狼の群れが出てきて、動く物はなんでもかんでも寄って集って骨まで貪り食うだ。

今までに何人も襲われて死んだだ。

んだから、日が暮れたら村のもんはだれも絶対山の中には入んねえだ。

おめさん方も悪いこた言わねえがら、村さ泊まって、明日越えればいいだべ（汗）」

「狼か・・・」

そういえば、山の方から狼の遠吠えのような音が聞こえるような気がするし、カラスの鳴き声も不気味だ。

タウは腕組みをして空を仰ぎ考え込んでしまった。

任務を前に狼相手に余計なことをして、万一隊員が怪我でもしたら、作戦に支障を来すのは明白だ。

しかし、何としても今日中に峠を越えたい。

「けっ、狼がなんだってんだ。 そんなのパツパと片付けてやるぜ！」

そう言い放ったヴィリーが、狼と聞いて急に活き活きし始めたのを見たタウは、これは絶好だと直感した。

多少危険は伴うが、狼相手にストレスを発散させてやるのも悪くない、そう考えたのだ。

タウは老人に向かって言う。

「助言は有難いが、我々も先を急ぐのでな、今日中に峠を越えねばならんのだ」

老人は青ざめて反対する。

「いやいや、そんだだあんた、死に行くようなもんだべ、命がいくつあっても足りねえだよ（汗）」

「心配すんなくてじいさん、狼なんざオレがまとめて退治してやるって！」

ヴィリーの言葉にタウがつけ加える。

「俺達は軍人だ、それにこういう事には慣れている」

「いやゝ、なんば軍人だって言うたって・・・（汗）」

「つべこべ言うんじゃねーよ！ まあ、泥舟にでも乗った気で待ってるんだな、明日から狼は出ないぜ」

「泥舟は沈むだよ・・・（冷）」

不安気な顔をする老人を残して、タウは再び馬の手綱を取った。

パシッ ヒヒン（馬の声）

山へ入ってすぐ、日が暮れた。

鬱蒼と茂る大木に囲まれて月明かりすら通らず、辺りは次第に暗闇に包まれ始めていく。

タウはランプのロウソクに火を入れ、御者席に立てた棒に吊して、馬の前方を照らした。

道幅はますます狭くなり、馬車ではすれ違うことも出来ない。

更に奥へ進むと、藪で覆われた道の両側が急な斜面となって、峠に近いことを知らせている。

そしてどこからか、狼の遠吠えや、何か合図でも交わしているか

のような鳴き声が聞こえ始めた。　ワオーン

その声はまだ大分離れているようではあるが、彼等が一行のことに気が付いているのは間違いないだろう。

緊張が走る。

タウとヴィリー、それにニートはそれぞれ剣に手を掛けて、周囲に気を配りつつ馬車を進めた。

アイヒは・・・、座ったまま首をカクンカクン、鼻ちようちんで居眠りしている。

そこへ都合の悪いことに風が吹き始め、草木の葉がガサガサと音を立てて揺れ出す。

これでは狼の動きが掻き消されて、気配も掴みずらくなる。

だが獣臭なのか、なにか嗅いだことのない不思議な臭いがかすかに漂ってくる。

狼が近付いているのは間違いない、鳴き声が一段と大きくなってきた。　ワオーン　ワンワン

察するに、どうやら一匹二匹、そんな単位ではない。

10か20か、いや、それ以上の相当な数がいると見える。

「かなりヤバいな・・・、これは、気合いを入れんと殺られるぞ・・・」

タウは独り言のように呟いた。

突然、馬がヒヒヒンと首を振りながら嘶き、その歩みを止めた。

とほぼ同時に、横の斜面の藪の中から、馬車の目前に一匹の狼が転がるように躍り出た。

「出た！狼だ！！」

タウが叫ぶ。

ヴィリーとニートが剣を抜き、前方を見る。　シャキン！

狼は頭を低くして四肢を踏ん張り、鋭い目つきで一行の方を睨み、牙を剥き出しにして喉の奥を鳴らしながら激しく

威嚇している。ガルルル

「よし！オレに任せろ！」

ヴィリーが馬車から飛び降り、狼に向かって駆け出す。ダッ！ところが、狼は急に体をフラフラふらつかせたかと思うと、その場に横倒しに倒れ込んでしまった。ドタッ

いきなり何が起こったのか、まるで分からない。

驚いたヴィリーは足を止め、剣を構えながらゆっくりと一歩ずつ近付いていく。

狼は一体何をしようとしているのか、これは演技なのか。

「どうしたヴィリー、何があった？」

タウが御者席の上から伸び上がってヴィリーの背中に向かって問いかける。

「なんだこいつ、全身ずぶ濡れだぞ」

ヴィリーは、剣の先で横になって倒れている狼の体をツンツンしながら答えた。

「死んだのか？」

「いや、死んでない。息はしてるが、動けないみたいだ」

狼は見たところまだ若い、1歳くらいのオスのようだが、目を閉じて横になったまま身動きもせず、ただぜえぜえ

息を荒げているだけだった。

しかも絶え絶えに。

「こりゃ時間の問題だな・・・」

「そうね、でも仲間が近くにいるかも知れないわ、油断は禁物よ」
ヴィリーに次いで馬車を降りたニートが周囲を見回して言う。

そこへ近づいてきたのが、騒ぎで目を覚ましたアイヒ。

「！！！」

アイヒは死にかけた狼を見るなり駆け寄って、素早くその横に跪いて狼の体に両手を翳し、気を集中して治療を開始した。

その行動を見て驚いたニートが慌てて制止する。

「ダメよアイヒ！ 近付いたら危険よ、いきなり襲ってくるかも知れないわ！」

狼の側に立っているヴィリーも同調する。

「そうだ、って言うかももうすぐ死ぬぜ、こいつ。 やってもムダだ」

だが、アイヒは全く従う意志を見せない。

「ダメです、止めません。 オオカミさんはまだ生きてます」

アイヒは2人に見向きもせず、ただ狼を見つめたまま黙々と治療を続けた。

額に汗をにじませながら拭おうともしないで、それこそ一心不乱に集中している。

こんなに健気で真剣なアイヒを見るのは珍しい。

そして数分後、狼がゆっくりと目を開いた。

それに気付いたヴィリーは咄嗟に剣を構えて警戒する。 チャキ！

だが狼はまだ体を動かすことが出来ないとみえて、目だけを動かしてアイヒの方へ視線を向けて威嚇した。 ガルルル

アイヒもそれに気が付いたが、治療を止める気配すら見せず、それどころかニツコリと微笑み返した。

「大丈夫ですよ、出血はしてないし、骨には異常はないみたいですよ。」

でもだいたい疲れているみたいですね。 ダメですよ、こんなに
なるまで無茶しちゃ」

まるで人に向かって話しているようだ。

狼は暫くアイヒの顔を見ていたが、何をするでもなく、表情も変えず、声一つ上げず、再び静かに目を閉じた。

まな板の鯉の如く。

ただただ黙ってその様子を見ていたヴィリーとニートには、まるで自分の全てをアイヒに委ねたかのように、
安心しきっているようにも見えた。

そうこうしているうちにも、周囲の狼達の声が一段と大きくなってきている。

ただ、その声はワンワン吠えるだけではなくてきていることにタウは気付いていた。

タウは御者席の上で、いつでも馬車を走らせることが出来るように待機しながら、狼の声に注意を払っていたのだが、

その声の中に、次第にガール・・という威嚇の声や、キャインキヤインという悲鳴のような声が混ざってきているのがはつきりしてきた。

一体やつらは何をしているのか、群れ同士のテリトリー争いか、仲間割れか。

いずれにしろ、大騒ぎしている音だけが辺りに鳴り響いていて、その姿はまるで見る事が出来ない。

そんな事態が続くにつれ、ヴィリーは段々ライラしてきた。

「くっそー、姿が見えんというのは性に合わん！」

そっちがその気ならこっちから出向いてやるぜ！」

ヴィリーは一気に駆け出すと、山の斜面の藪の中へ飛び込んで行った。

「あつ！ 待ちなさい、ヴィリー！（汗）」

ニートが叫ぶ。

「くそっ、あいつ勝手なマネを！」

タウが慌てて御者席から立ち上がって馬車を飛び降りた。

「ニート！ お前はアイヒの側にいろ！」

タウはそう言い残してヴィリーの後を追ったのだが、暗闇の藪の中ではヴィリーの姿を見つuckerのは困難を極める。

タウは、狼たちが騒いでいる音を頼りに斜面を登った。

その方向に行けばヴィリーがいるに違いない。

案の定、ヴィリーの大声が聞こえてきたが、何か様子が変わた。

そういえば、先程から急激に狼の数の数が少なくなってきた。

「どわっ！ な、なんだこれは！」

ヴィリーの叫び声が聞こえた。

タウは急いでヴィリーの声のする方へ走って行くと、木々の間の藪の中のあちこちに何匹もの狼が倒れている。

どれも既に息絶えてしまっているようだ。

そしてその先には、大きな得体の知れない物体とその周りに大量の狼の死体、それを前に立ち尽くすヴィリーがいた。

「ヴィリー！ 大丈夫か！」

タウはヴィリーの側へ歩み寄りながら声をかける。

「お、タウか・・・、なんだあれは？」

ヴィリーが指差したその先には、得体の知れない巨大な物体がゴニョゴニョと、地を這うように動いていた。

それは半透明の、液体生物のような物体だった。

クラゲの傘のようでもあったが、3m以上はある大きなものだった。

「あれは・・・、恐らくスライムだな・・・」

「スライム！？ あのでっかいのか？」

「たぶんな・・・、どうやら狼を襲って食っているようだ、見てみる」

タウに言われてよく目をこらして見てみると、半透明のスライムの体内に、何匹かの狼が取り込まれているのが

分かった。

「ああやって、体内に取り込んだ物を溶かして食うんだな・・・、きつと」

「なに！？ じゃあ、この周りに転がってる狼はなんなんだ？」

「恐らく、一度体内に取り込んで、中で窒息死させてから放り出したんだろう。」

狼の死体はどれもこれも体液で全身ずぶ濡れになっている。

そうして群れを全滅させておいてから、再び一匹ずつ取り込んで、溶かして食うんだろう。

あっちこっちに骨が散らばっているのが見えるか、全部狼の骨だ」

「・・・なんてこった・・・、あのヤロー、オレ様の獲物を全部殺しやがって・・・」

ヴィリーはせっかくのストレス解消の相手を奪われて悔しがった。「こうなったら、あのナメクジ野郎で腹癒せさせてもらおう！」
ダダッ！

ヴィリーはスライムに向かって突っ込んで行った。

「やめろヴィリー！ ヤツに剣は効かん！」

タウが制止したが、ヴィリーは構わずスライムに斬りつけた。

シュパッ！

スライムの体の一部、しかし全体がグニャグニャしていてどこが頭か体が分からない、その一部がスッパリと裂けて切れた。

透明な体液が飛び散って・・・、ところがすぐにまたくっついて元に戻ってしまった。

「な、なんだこのヤロー！」

驚くヴィリー。

「だから言っただろ、ヤツに剣は無効だ。

スライムは、アメーバのような小さい原始的な軟体生物が無数に寄り集まって出来たものだ。

一つの個体が細胞の集まりで形成されている点では他の生物と同じだが、スライムはその細胞一つ一つが一個の

生物で、それぞれが単独で生命活動を営んでいる。

ヤツらに意思はない、ただ食欲があるだけだ。

ただこうして寄り集まることで、それぞれの細胞にある一定の役割分担が生まれるようだが、細胞同士の繋がりが

緊密ではないから、いくら斬ったところでスライムは殺せない。
細胞全てを死滅させない限りはな」

「く・・・、なんてこった・・・」

つまり、ヴィリーとタウの剣ではスライムに何ら損傷を与えることが出来ない。

ヴィリーは口惜しそうにスライムを見つめた。

だが攻撃を受けたスライムは、今度はヴィリーに向かってズルズル接近してくる。

「やべえ！ こっちに来るぞ！」

「お前が余計な手を出すから、敵と思われたに違いがない・・・、いや、狼と間違われてるのかも知れん」

いずれにしろ、2人はスライムに手も足も出せない。

2人はじりじりと後退りしながらスライムの動きを警戒した。

スライムはなおもズルズルとゆっくり接近してきていたが、突然、体の一部が触腕のように突き出し、ヴィリーに

向かって伸びてきた。 シュルルッ！

「どわっ！」

咄嗟に身をかわすヴィリー。

「やべえぞ！ 襲ってきた！ どーすんだよ！」

「この場は逃げるしかあるまい」

2人が逃げようとした時、山の下からニートとアイヒが登ってきた。

「どうしたのヴィリー、狼はやつつけた？」

ヴィリーを見つけたニートが声をかける。

「狼なんかみんな死んでらあ！、全部あいつがやったんだよ」

「あいつ？」

「見てみな、スライムだ！」

言われてニートがよく目を凝らして見てみると、暗がりの中にゴ

ニヨゴニヨ動くものが。

「うわ！ 何あれ！？ でつか・・・」

「だからスライムだっつってんだろ！」

タウはニートの後についてきたアイヒを気遣う。

「大丈夫か、アイヒ」

「はい、ワンちゃんは下で眠ってます」

「ワンちゃん？」

タウはアイヒ自身のことを気遣って言ったのだが、アイヒは狼のことだと勘違いしている。

「そうなのよ、アイヒったらあの狼をワンちゃんって呼ぶのよ。犬じゃないって言ってるのに」

「でもワンワン言うんですよ。 だからワンちゃん」

「まあ、同じイヌ科だからな・・・」

アイヒを見つけたヴィリーが叫んだ。

「丁度いい、アイヒ！ あいつに一発電撃をお見舞いしてやれ！ やつは剣で斬っても死なんのだ。」

ヤツがワンちゃんをヒドい目に遭わせた張本人だあ！

「はい！わかりました」

「いいの？タウ」

「いいだろう、今はそれしか手がない」

「えい！」

アイヒの電撃が炸裂。 バチバチバチッ！

スライムは、その体の殆どが水分で出来ているため電撃を浴びて通電し、細胞が焼け、水分が沸騰してブスブスと

体のあちこちから煙と水蒸気を上げ始め、とたんに動かなくなつた。

それこそみるみるうちに。

もはやスライムに生物らしさは感じられない、ただの潰れたゼリーと化してしまった。

辺りに焦げ臭い、生臭い臭いが漂い始める中、ヴィリーが飛び上

がって喜ぶ。

「やったぜ！ よくやった、アイヒ！」

「ざまー見る！ オレ様の獲物を横取りした罰だ、このヤロー！」

「あんたは何もしてないでしょ！」

とにかくさっさと戻りましょ、臭くて気持ち悪いわ」

ニートは鼻を押さえてそそくさと山を下り始める。

一行が山を下り、馬車のいる峠道まで戻ってくると、最初に出会った狼はまだ道端で横になっていた。

狼は、アイヒの匂いを嗅ぎつけると頭を上げ、アイヒの方を見てクーンクーンと声を出した。

「ワンちゃ〜ん」

アイヒがニコニコしながら狼に駆け寄り、抱きついて頭を撫で撫でする。

それに返事をするように、狼はアイヒの顔をベロベロ舐める。

「なんだなんだこいつ、ちょっと見ない間に完全にアイヒに懐いてやがる」

ヴィリーが呆れると、ニートがさもありませんという顔で答えた。

「そりゃそうよ、命の恩人なんだもの」

「おめーが偉そうに言うな」

タウは大人しく待っていた馬の首を労うようにポンポン叩いた後、馬車の御者席に跳び乗り、みんなに声をかけた。

「よーし、みんな乗れ、出発するぞ。」

夜明けまでに峠を越えれば、明日中にはトレーデリヒ街道に合流出来るはずだ。

行くぞ、アイヒ」

「はーい。 じゃあね、ワンちゃんバイバイ」

その2日後、無事にトレイデリヒ街道に合流した一行は、遂にブレイトマン男爵領に辿り着いた。

一行はそのまま男爵の屋敷がある中心都市メーレントロットを目指す。

メーレントロットは男爵領北部のほぼ中央にあり、さすがに領主の邸宅がある町だけあって、これまで通過してきたどの町よりも賑やかで華やいている。

しかし所詮は地方の、しかも裕福ではない小さな領の町、王都ヴオルストブッフとは比較にならない簡素さである。

男爵の邸宅は、そのメーレントロットの外れにあった。

「ここが、そうなのか？」

ヴィリーが馬車の上から身を乗り出す。

それにタウが答える。

「そのはず、なんだが・・・（汗）」

それは、常緑のキンメツゲの生垣で周囲を囲われた、町の中でもひととき広い敷地にある大きな3階建ての木組みの

館で、明らかに一般家庭の住居ではないのだが、門番もおらず、人気がない。

いくらこの町が平和でのどかとはいえ、およそ貴族の住居としては不用心が過ぎると思われる。

「とりあえず、入ってみよう」

タウは、馬車から降りて鉄格子の門を開けると、馬を牽きながら中へ入って行く。

館の方へ歩いて行くと、館の陰にある木々の方から一人の小柄な男が歩いて近付いてくるのが見えた。

「こりゃ！ おめさん方勝手に入るでねー、ここは男爵様のお屋敷だべ」

どうやら庭師のような老人だった。

「すまんな、門番がいなかったものでな。 ブレイトマン男爵閣

下にお会いしたいのだが」

「門番なんかはじめっからいねーだよ。

ありやりや、おめさん方地元の者でねーだな、何者だべ」

馬車から飛び降りたヴィリーが言う。

「なんだ？ てめーの方から呼んどいてそりやねーだろ。 オレ

たちや護衛連隊の、ドラゴンフォースだ！」

「ドラゴンフォース！？ ドラゴンフォースってなによ！」

びつくりしてニートがつっこむ。

「バカヤロー、オレ達はドラゴンを倒した英雄だぞ。 英雄には

英雄に相応しい名前が必要だ。

だからオレ達は、これからドラゴンフォースと名乗ることにした」

「勝手に決めんな！

それにドラゴンをやったのはアイヒよ、あんたは何もしてないじゃない！ おまけに英語だし」

「いちいち細かいことは気にすんなって、それになんかカッコいいだろ、なんかこう・・・優柔不断って感じで」

「それを言うなら勇猛果敢だ！ バカ！

あんた、もしかしてずっとその名前を考えてたのね、どうりでいつものバカらしくないと思ってた」

「おうよ！ 名乗りを挙げるチャンスを待ってたんだ！」

「護衛連隊・・・って言うと、あんただが都から来なすった山賊退治の軍隊かね、こりや大変だ」

そう言うと、庭師の老人は慌てて館の玄関の方へ向かってそそくさと歩き出した。

「タント様～！ タント様～！」

庭師に続いて一行が玄関のエントランスに入ると、そこへまた一人の小柄な老人が現れた。

だがその老人は庭師とは違い、礼服を着た、身なりの整った小綺麗

麗な姿をしていた。

「フーデル！ なんじゃ騒々しい」

「タント様、来なすっただ、山賊退治の軍隊だべ」

小綺麗な老紳士は、軍隊と聞いて驚きと喜びの表情を浮かべた。

「おお！ ではお主達が国王陛下の……の……の……、何じやったかの？」

「護衛連隊です」 タウが穏やかな口調で言うと、

「ドラゴンフォースだ！」 ヴィリーが大声で言い、

「ちがう！」 ニートが即座に否定する。

「ドラ？……」

「いや、護衛連隊です」

「おお！ そうじゃったそうじゃった、これはこれは長旅ご苦労様でしたな。」

わしは、男爵様の元で執事をやっておりますオル・タントと申しますじゃ。

さ、さ、みなさん中へ入って、こちらで寛いで下され。

フーデル、お前は馬を厩へ連れてって、クラトラーを呼んでま
いれ」

「かしこまりましたべ」

一行は応接間へ通された。

さすがに貴族の邸宅だけあって、応接間は目を見張るほどの豪華
さだった。

壁には肖像画、窓にはレースのカーテン、床には幾何学模様が織
り込まれた絨毯が敷き詰められ、細かい彫刻や装飾が

施された家具や調度品が並び、手を触れるのも憚られるような高
価そうな壺などの陶磁器が飾られている。

そこは正に、一般人にはおよそ縁のない雰囲気と気品を持った世
界が広がっていた。

ソファはゆったりしていてフカフカ。

ヴィリーがさっそく、勧められてもいないのにドツカリとそのソファにふんぞり返る。

「ふー、こりゃいいや」

「やめなさいヴィリー、失礼でしょ」

ニートが叱責するが、ヴィリーは聞く耳を持たない。

「かまうこたねーよ、オレ達は客人だぜ。お茶はまだかな？」

そこへ、先程の執事オル・タントが新たに2人の男を連れて入ってきた。

1人はスーツ姿で丸メガネをかけた、インテリ風のすらりとした細身の青年で、もう1人は、胸元にフリルの付いた

白いブラウスを着た坊ちゃん刈りの、いかにも金持ちそうな少年だった。

入ってさっそく、丸メガネの青年が言葉を発する。

「はじめまして、私はバナール・ズースペクトと申します。

こちらの、ブレートマン男爵家次期当主、ナウケ坊ちゃんの家庭教師を務めさせて頂いております」

そう紹介しながら、青年バナールは隣りにいるナウケ・フォン・ブレートマンの方へ手を向けた。

「ボクがナウケだ」

と一言で挨拶を済ませたナウケは、華奢でなよなよした、蒼白い顔をした頼りなさ気な少年で、年齢は15、6歳位だろうか。

いくらか幼く見えるのは、その坊ちゃん刈りのせいもあるのだろう。

いかにも世間知らずでわがままそうな、横柄な態度をしている。

「男爵閣下はどちらに？」

タウが質問すると、バナールが答えた。

「残念ながら、旦那様はこちらにはおられません」

「いない？」

今度は執事のタントが前に出て説明する。

「実は、旦那様は持病のリューマチが悪化致しまして、現在は湯治のため・・・、ため・・・、ため・・・、

なんじゃったかの？」

バナールが助け船を出す。

「ヴェップーです」

「そうそう、そのヴェップーで逗留中ございまして・・・（汗）」

領主が病氣療養中とは想定外だった。

ヴェップーとは、ゾルクロス王国南東部にある有名な温泉保養地の事で、ブレートマン男爵領とは随分離れている。

「では山賊退治は中止ですか？」

「あ、いえいえ、それにはご心配及びません。皆さんが到着し次第、行動に移るよう仰せ付かっております。

で、後続の部隊は何時ご到着で？」

「後続？」

バナールの言葉に一行は首をかしげた。ヴィリーがソファにふんぞり返ったまま素っ気なく言う。

「後続って何だよ、来たのはオレ達だけだぜ」

「な、何ですと（汗）！！」

バナールは驚きの声を上げた。

続いてナウケが、そのカン高い声で感情を露わにする。

「お主達4人だけで参ったと言うのか！？」

「そうですが・・・」

「ああ、な、なんとすることだ・・・」

我々は父上から山賊退治のエキスパート、最精鋭部隊が大量に送り込まれると聞いて、期待に胸を踊らせて待ち

焦がれていたというのに・・・。

それが・・・、たったの4人とは・・・（汗）。

一体何が・・・、何があったと言うのだ！。

これはなにかの間違いか！ 何故たったの4人しか来ないのだ
ああ！」

ナウケはギョツと拳を握り締めたまま、俯いて悔しがった。 な
んだか役者じみている。

「おい、ちよつと待て、たった4人とは聞き捨てならんな！」
ヴィリーが目つきを鋭くして、貴族の若を睨みつけた。

「オレ達を誰だと思ってやがる！ドラゴンフォースだぜっ！」

「ドラゴンフォース？ ほほう、ブラストビートで突っ走れっ、
とか言うやつだな」

「おうよ！ 猪突迷信ってヤツよ！」 <ブラストビートって何
だっけ？>

「やめなさいヴィリー、迷信じゃなくて猛進でしょ。」

だいたい山賊退治の専門部隊ってなによ、そんなもの何処にも
無いわよ」

ニートはヴィリーを止めながら、一番話の解り易いバナルの方
を向いて言った。

「そ、そうなのですか？」

「そうよ、そんな有りもしないものに期待してるなんて、どうか
してるわ。」

きつと男爵は、なにか誤解したか、ウソを言ったのね」

「なんだと！ お前は父上を愚弄する・・・気が・・・」

ポ・・・（赤）

と、一度は激昂しかけたナウケだったが、ニートの顔を見て急速
にその勢いを落とした。

どうやらニートに対して何か思うところがあるらしい。

「だ・・・誰だ君は・・・（汗）」

タウが慌てて謝罪する。

「これは失礼しました、坊ちゃん。」

紹介がまだでした、これは私の部下のニート・エマンツエです。

そしてこっちがヴィリー・アイゲンとアイヒ・ヘルンヒェン、私が護衛連隊第7小隊長タウゲニヒツ・ラングヴァイ

ラー軍曹です」

だがナウケの耳には一言しか届いていなかったようだ。

「そ、そうか・・・ニート・・・（赤）」

バナルは、手で顎を摩りながら考え込んだ。

「しかし困りましたね・・・、4人だけとは、想像もしてませんでした・・・。

まあ、何百人も来られてもそれはそれで困りものですけどね」
タウの方にも聞きたいことはあった。

「しかし、我々はそちらの方でも騎士団のご用意があると伺っていたのですが」

「騎士団ですか・・・、それは我々のことです」

「我々？」

その時、最初に出会った庭師と、馬丁のクラトラの2人が、けつたいな格好をして部屋に入ってきた。

2人は、ブリキのバケツを潰したような、ベコベコに波打っている金属板を胴に巻き、頭に鉄鍋を被って、庭師は

大型の剪定鋏を、馬丁はピッチフォークをそれぞれ手に持っている。

バナルが言う。

「ここにおられるナウケ坊ちゃんを団長とし、執事のタント、庭師フーデル、馬丁クラトラとこの私が、騎士団の

全員です」

「なにぃ!？」

ヴィリーが驚きの余り、ひっくり返ったような変な声を上げて立ち上がった。

「これが騎士団だとお？」

ヴィリーの目にはこう映っていた。

ヘナヘナでナヨナヨのガキ、じじいが2人、どこにでもいる田舎の農夫、インテリでヒョロヒョロの若造。

「こいつらのどこが騎士団だつてんだよ！　こんななんの役にも立たねーぞ！」

対して執事のタントが怒鳴る。

「この無礼者！　坊ちゃまになんということを！」

「そうじゃねーかよ！　てめーなんかタダのジジイだろー！」

「やかましいわ！　わしとて今少し若ければお主なんぞに負けはせんわい！」

「なんだとこの老いばれ！　試してみるか！」

タウが止める。

「もうよせヴィリー！　これから一緒に山賊退治をやるうというのに、今からそんなのでどうする」

「一緒だあ？　冗談じゃねーぜ、こんなヤツらと一緒に戦えるかつ！」

もういい！　オレらだけでやる。　巻き添えはごめんだぜ」

「くっ・・・、何という屈辱・・・（汗）」

タントは拳を握り締めて口惜しがったが、それ以上のことは何も出来なかった。

ヴィリーは紛いなりにも王室直属の護衛連隊員、並の軍人ですら敵わない相手である。

タントのような、なんの兵役の経験もない老人が、刃向かったところで歯が立たないのは目に見えている。

「ヴィリー、一緒に戦うとは、なにも共に最前線で剣を振るう事だけを意味するものではない。

剣を持たなくても一緒に戦える方法はいくらでもある、それを忘れるな」

そう言つてヴィリーを窘めるタウの発言は、タントをはじめとし

て戦闘経験の無い名ばかりのプレートマン騎士団の

メンバーにも力を与える、いかにも国防軍の補給部隊の出身者らしい説得力を持っていた。

バナールが話を進める。

「しかし困りましたねえ。　これだけの人数で山賊退治となると、かなり困難ですね」

双方は、互いに相手の陣容がもっと充実したものと思い込んでいた。

両陣営合わせて僅か9人、しかも男爵側が戦闘未経験者とは、全くもって予想だにしていなかった。

「もつと人を集められないのですか？」

「それは恐らく無理でしょう。」

元々旦那様は私兵をお持ちではありませんし、既に3回勇士を募ったのですが集まりませんでした。

領民を強制的に参加させる事は出来るかも知れませんが、旦那様はそれをお望みではありません」

「うゝむ・・・」

「どーすんだよタウ、この人数じゃ山狩りなんか出来っこねーぞ」

「そうね、山賊退治って言ったら普通は山狩りだけど、山狩りは百人単位で一斉にやらないと効果がないわ」

さすがに山賊退治の経験者であるヴィリーとニートはよく分かっている。

山に籠もる山賊を退治するには、百人から数百人が等間隔に広がって、山の麓から頂上に向かって登り、隠れ処を

見つけるか、或いはそこから追い出して、徐々に包囲網を狭めて一網打尽にするのが最も簡単な方法である。

ヴィリーの場合もニートの場合も、以前に参加した山賊退治は、共に山狩りによるものだった。

つまり、9人で山狩りを行うのは到底不可能、というより全く成果が望めないのである。

「ホフアート子爵側に応援を頼むことが出来ればいいんだが・・・

「タウの独り言のような呟きに、即座にバナールが反応した。

「それは難しいですね。

確かにホフアート子爵は経済的にも豊かで、領内には港湾施設が幾つもありますので、警備の人材や、税関にも政府

の役人が沢山常駐しています。

しかし、国王陛下がドロツセル峠はプレートマン男爵領とする、とお決めになられましたからね・・・。

これは、経済的に困窮している我が男爵家を慮つてのことだと、旦那様はおっしゃっておられました。

峠に關所を設けて通行税が徴収出来るようになれば、それは願ってもない事なのですが、そのためにホフアート子爵

が手を貸して下さると思えません。

ホフアート子爵とはそういう方です。

他人を利用するために己が部下を遣わすなど有り得ないでしょう」

「お詳しいんですね」

「私は、こちらでお世話になる前は、ホフアート子爵の元で会計の仕事をしていましたから、ほんの1、2年ですが。

ですので、あの方の性格は理解しているつもりです」

そう言ったバナールが、その眼鏡の奥で幾らか険しい表情を見せたのを、タウは見逃さなかった。

見たところ、バナールは物腰も穏やかで、話し方も丁寧で礼節を弁えている。

だが彼はその名前から貴族ではない。

恐らくは商人か学者の息子、何れにしる平民の出であろう。

典型的な貴族であろうと思われるホフアート子爵とは、思想が合わないとしても無理はない。

タウは暫し考えた後、バナールに質問した。

「敵の・・・山賊の人数は分かかりますか？」

「詳しい数までは分かりません。」

ドロツセル峠に一番近いギムペル村の村長に、情報を集めるよう要請しておきましたが、今分かっているのは、

賊は一つではないということだけです。

少なくとも2つの集団があるらしいのですが、或いはもっと多いのかも知れません」

「情報が少な過ぎるな・・・」

「残念ですが、私が知っているのはそれだけです。」

村へ行けばもっと色々と分かる事もあるとは思っていますが、皆さんお疲れでしょうから、とりあえず今日はこちらで

お休みいただいて、明日現地へ向かうことにしましょう。

さつそく食事と部屋の用意をさせますので、暫くお待ち下さい」

バナールら騎士団の一同が部屋を後にしようとすると、ヴィリーがそれ呼び止めた。

「おいちよつと待て」

最後尾にいたバナールが立ち止まって振り返った。

「何でしょう？」

「この屋敷にいるのは、お前等だけで全員か？」

「今は、他にメイドが9人いる以外は皆旦那様に同行しています
が、それがどうかしましたか？」

「あのガキに姉ーちゃんとかいねーのか？（ニタニタ）」

「ねーちゃん？」

バナールは、何故ヴィリーがそんな質問をするのか不審に思ったが、礼節をもって丁寧に応えた。

「坊ちゃんにご兄弟はおられません、旦那様のご子息は坊ちゃん
お一人だけです」

それを聞いたヴィリーは、途端に落胆した表情を見せてソファに体を埋めながらため息をついた。

「はあー、なんだつまんねー・・・」

そしてタウを横目で睨む。

「おいタウ！ てめーウソついたな！（怒）」

「嘘はついたらん、あくまで仮定の話だと言ったはずだぞ。 ま

さかお前、ここまで来てやめるとは言わんだろうな」

「さあねー、もうどーでも良くなっちまったしなー」

ヴィリーは完全にひねくれてしまった。

「まあ、そう言うな。 ここで活躍すればそのうち道も開けると
いうものだ」

「さあー、どーだかねー・・・」

こんなちんけな田舎で1つ2つ手柄を上げたところで、何がど
ーなるつてもんでもなさそーだけどなー」

「それはどうか。 どんな壮大な計画も、最初は小さな成果を
得るところから始まるんだぞ。」

お前のハーレム計画も例外ではあるまい」

それを聞いたバナールが驚いた顔で聞き返す。

「ハーレム計画？」

「ああ、もういいよ、てめーに用はねー」

ヴィリーは目を閉じたまま、右手の手首だけを左右に振り素っ気
ない返事をした。

とつとと出て行けと言わんばかりに。

ヴィリーの不躰な態度をフォローするように、タウがバナールに
近寄って耳打ちをする。

「こいつは単に目立ちたいだけなのです、特に外部の女性に。
それ以外の動機はないのです。」

しかも底知れぬ体力と強靱な体を持っています。

ですから、うまく煽って使ってやれば以外と人畜無害なんです
よ」

「そ、そうなんですか？」

バナールはヴィリーの単純な性格を知って、少々いたずら心が芽生えてきた。

そして、ヴィリーに向かってニコニコ微笑みながら言ってみた。

「ではヴィリーさん、こうしましょう。」

山賊退治が成功した暁には、皆さんの活躍を本にして出版する
というのはいかがですか。

きつと大評判になりますよ」

「本？」

「そうです、もちろん全国の貴婦人やご令嬢方にも読めますよ。
私もお力になりますよう」

「なんか、いけ好かねーけど、まあいいか・・・」

そう言って、どことなく無関心を装うヴィリー、しかしその顔は
しつかりニヤけていた。

タウは護衛連隊の活動が明文化され、しかも一般に向けて出版さ
れるなど現実には有り得ない事だと承知していたし、

バナールの発言がヴィリーをその気にさせるための虚言であるこ
とも理解していたが、この場は何も言わずに流して

おこうと考えた。

今はそれがベストだと。

ギムペル村、

そこは何の変哲もない、山間の寒村だった。

村の人口は百人足らず、その多くが林業か木材加工業に従事して
いるという。

しかし、村の一番の働き手である若い男達は山賊の出没に伴って
山での仕事を追われ、その殆どが領外の別の山地へ

出稼ぎに出ている、と現状を説明してくれたのは村の村長。

であるからして、山賊退治は悲願ではあるけれど、そのために出

せる人材はいないのだと嘆く。

一行は、街道沿いにある2軒の旅籠に分散して宿泊することにした。

村にある宿泊施設はこの2軒だけで、街道を挟むように向かい合っ

て建っている。以前はその周囲の食堂等と並んで、それなりに繁盛していたそうだが、ドロツセル峠を迂回せざるを得なくなつて

以来、商人や旅人がここを宿泊地とすることが殆どなくなつてしまつた。

迂回に必要な時間と行程を考慮した場合、隣り町に宿を取った方が都合がいいからである。

今はせいぜい休憩のために立ち寄る程度なのだと宿屋の主人は言う。

宿屋の隣りにある食堂に集まつた一行9人と、村長、宿屋の主人、その時間、食堂に客はおらず、6つほどある4人掛けテーブルの3つに各々腰を掛けた。

村長と宿屋の主人は、それぞれ地元の村人や、宿屋に立ち寄る商人等から山賊に関する情報を集めていた。

その内容の多くは重複する部分があり、それをバナールが整理するのに多少時間を要したが、やはり少なくとも2つの

グループがあるらしい事がはつきりしてきた。

その1つが、ダウスという名の男を首領とする十数人程度の集団で、数年前から時々出没していたらしい。

このグループの特徴は、殆どの場合商人の荷馬車だけを襲い、人は殺さず、積み荷も全て奪わず、自分達に必要と

思われる物に必要な分だけ持ち去るという、山賊にしては珍しい良心的(?)な行動を取っている。

もう1つは文字通り凶悪で、基本的には商人の荷馬車を襲うが、何故かホフアート子爵領側から峠に入るものしか狙わない。

しかも、商人や御者等その場にいた者は馬に至るまで全て殺し、積み荷は根刮ぎ持ち去り、時には旅人をも襲っては

金品を奪い取り殺害するという傍若無人ぶり。

この集団の人数は不明だが、どうやら1年位前から出没し始め、次第に過激になって行ったようである。

つまり、この集団の存在が、今回の任務の直接の引き金となったのは明らかで、峠を通行する商人達はこの集団をことさら恐れている。

「なるほど・・・」

村長や宿屋の主人の話聞いたタウが徐に口を開く。

「前からいた、そのダウスとかいう男のグループは、良くも悪くも程度を弁えていたということか・・・」

「なに言ってたんだ、山賊に程度もへつたくれもあるか」

食堂の木製椅子をギイギイ軋ませて背にもたれるヴィリーがいつも通りの口調で、しかも真つ当な意見を言つと、

ナウケが同調した。

「いかにも！」

山賊とはすなわち悪しき存在であり、どんなに体裁を繕おうとも、決して正義の味方たり得るはずがない」

「ご明察！ いやあ坊ちゃん、実にすばらしい」

すかさずタントが褒める。

「バカかてめーは、正義の味方はこのオレ達、ドラゴンフォースに決まってるんだろ！」

「このたわけ者！ 坊ちやまに何ということをして！」

「いいよ、爺、こやつは、バカという発言をする者の方がバカなのだ、と言つ常識を知らんだ」

「ガキかてめーは・・・」

「ガキとはなんだ無礼者！　こう見えてもボクは20歳だぞ！」
「な、なにい！？」

15、6歳にしか見えなかったナウケが20歳とは意外だった。年の割に幼く見えるというのには恐らく、見た目よりもむしろ、ナヨナヨしているくせに言う事だけは一丁前、つまり

言動不一致なのが大きく関係していると思われる。

しかも本人は全くそれを自覚していない。

「てめーがオレより年上だあ？」

「ふふん、どうだすごいだろう」

「そんなことで自慢すんな！　本気でバカだな、てめえ・・・」

さすがのヴィリーも呆れ果てて、もうそれ以上言い合いをする気力も失せた。

ナウケは偉そうにふんぞり返って、隣りのテーブルにいるニートの方をチラッと見た。

ニートはテーブルに肘をついて手に顎を乗せ、所在なさに窓の外をぼんやり眺めている。

彼女はこのギムペル村に来てから一度も口をきいていない。

ヴィリーとナウケのやり取りも全く聞いておらず、それどころか村長やタウの言うことすら耳に入っていないようだ。

まるで存在感、というより生命感さえ感じられない、ほとんど腑抜け状態で、その横で美味しそうにプリンを頬ばる

アイヒの方がよっぽど頼り甲斐があるように見えるというのは明らかに異常事態だ。

だがバナールにそんなことが分かつはずもなく、彼は一刻も早く作戦を立案し、それに基づく行動の段取りの支度を急ぐべく考えていた。

「で、軍曹さん、作戦はどうします？」

「そうですね・・・、山狩りが不可能となれば、敵を誘き出す以

外に方法は無いでしょう」

「おびきだす？」

「幸い、敵の人数はそれほど多くはない。

2つの集団を一度に叩くのは無理としても、1つずつなら勝ち目はあると思うのですが」

それを聞いたナウケが、調子に乗ってテーブルをドンと叩いた。

「何を言う！　こちらから正々堂々打って出るのが道理であろう。大義は我々にこそあるのだぞ。　今さら何を恐れることがある！」

そう勇ましく威勢を張ってみせ、正々堂々とか大義名分とか、現実を見据えずプライドだけで生きている貴族がよく

口にする決まり文句を並べ立てた。

タウは冷静に反論する。

「大義はどうあれ、これだけの人数では選択出来る作戦は限られてしまいます。

それに、敵は山の特徴を知り尽くしているはず、むやみに攻めるのはそれこそ自殺行為というものです」

「なるほど・・・、山では敵に地の利がある、ということですね。ではどうやって誘き出しますか？」

バナールはナウケの事を意識しつつも、やはりタウの意見を尊重した。

自分の発言をあっさり切り捨てられたナウケは、多少イジけてしまった。

半分ふてくされたような顔をしながらぶっきらぼうに言う。

「ならば山に火を放てば良からう。

さすれば、いかに卑劣なやつらとてコソコソ隠れ回っている訳にも行くまい」

「そ、それは出来ませんよ、坊ちゃん（汗）」

「何故だ、バナール」

「この地方の民衆は、林業を生活の糧にしています。

火を放って山を丸裸にしてしまつては、例え山賊が退治出来たとしても、民衆も生活出来なくなつてしまいます。

それでは意味がありません」

「そ、そんなことは分かつている！ 言つてみただけだ・・・（汗）」

些か赤面しながら慌てて取り繕うナウケ。これで少しは自分の視野の狭さが理解出来ただろうか。

タウが具体的な話を始めた。

「敵を誘き出す方法は1つ、エサを撒く以外にない。

そこで、馬車を、我々が乗つてきた馬車を隊商が使うような荷馬車に改造したいのですが」

「改造、ですか？」

「そうです、あの馬車には幌がない。

積み荷が外からまる見えになつてしまつと都合が悪いんです。だから幌を付けて、積み荷が何だか分からなくしなければなりません」

「積み荷ってなんだよ、何を運ぼうつてんだ？」

「積み荷はお前だ、ヴィリー」

「オ、オレ？」

「そうだ、我々が積み荷となつて馬車に乗り、峠へ入る。そして現れた山賊を退治する、という寸法だ」

「なんかすつげー単純」

「単純なればこそ引つ掛かる。余計な策を労したところで相手に警戒されるだけだ」

バナールが不安を口にする。

「しかし、必ず襲つてくるという保証はあるのですか？」

今は殆ど利用しなくなった峠を、しかも護衛の兵士も付けずに通つたら、それこそ敵に怪しまれはしませんか」

「そうですね、確かにその保証はない・・・。

現れるまで何度も行ったり来たりするのも、逆に罷だと教えているようなものだし。

そこで、ある物を用意していただきたい。それを使えば必ず敵は現れる」

「分かりました。

ところで、皆さんが積み荷に隠れるとすれば、御者は誰か他の者がつかねばなりませんね」

「それはクラトラーさんをお願いしたい」

「クラトラー!？」

唐突に出たその名前に驚いた一同は、一斉にクラトラーに注目した。

「え?わ・・・わスだスカ?(汗)」

もちろん一番驚いたのは名前を出されたクラトラー本人。

彼は目を丸くしておどおどした。

クラトラーはどこにでもいそうな平凡な40歳代の男で、日焼けしたその顔は短い頭髪と無精ひげ、太い眉と、

いかにも体毛が濃そうな、それでいて純朴そうな目をしている。

そして見るからに農作業が板に付いた、小柄ではあるがガッチリとした筋肉質の体型の持ち主である。

タウが彼を選んだ、その理由を話す。

「クラトラーさんは、見ての通り足腰もしっかりしているし、なにしろ馬丁ですから馬の扱いには慣れている。

作戦の同伴者としては最適でしょう。

もちろん戦闘に参加していただく必要はありませんし、山賊が出たらすぐ逃げてもらわねばなりません。

そのために一番足の速そうなクラトラーさんをお願いするんです」

「なるほど、どうです?クラトラーさん」

「は、はあ・・・、わスでよければ・・・(汗)」

「よろしい、ではさっそく準備にとりかかりましょう」

バナールがクラトラーに意向を聞くと、クラトラーは些か躊躇しながらも承諾し、作戦が実行される運びとなった。

準備は全てバナールの指示で行われ、彼はすぐに馬車の改造に取り掛かった。

彼は馬車を採寸すると紙に簡単な図面を書き、村長によって集められた数人の大工に材木加工の指示を出す。

幸い、この村は古くから林業と木材加工に携わる人が多いため、若い人材がいなくても一線を退いた老職人達が

喜んで手を貸し、材木のストックにも困らない。

2日を待たずして荷馬車は完成する見込みとなった。

だが、タウがリクエストした、山賊を確実に誘き出すための“ある物”は、調達に今少し時間を要することが判明した

ため、それまで作戦の開始は先延ばしになった。

つづく・・・だつてよ。

第2部

Leibstandarten SIEBENTZUG

- またまた 護衛連隊 第7小隊 -

STAND ABLAZE

つづき・・・だつてさ。

その日の夜、皆が寝静まった宿屋の裏庭で、ひとりだけ起きている者がいた。

ニートだった。

彼女は刀を手に、黙々と素振りに精を出していた。

無数の星と月明かりの下で、いつになく真剣な面持ちで、額に汗しながら。

それはまるで、何かに取り憑かれてもしたかのように、何度も何度も、繰り返し繰り返し、ただひたすら続けていた。

だがそこに威圧感とか緊張感といったものは感じられない。

どちらかというと、悲壮感めいた雰囲気漂っている。

そこへハウが近付いてくる。

「どうした、眠れないのか」

「タウ・・・」

声を掛けられて振り向いたニートは素振りを止め、額の汗を拭いて刀を鞘に収めた。

「別に・・・、そんなんじゃないわ・・・」

そして近くにあった切り株に腰を下ろすと、遠く夜空を眺めた。

「お前、ずっと様子が変だぞ、何かあったのか？」

「そお？ 別に、なんにもないけど・・・」

そう言いながらも、ニートは決してタウと視線を合わせようとはしない。

「そんなに山賊退治が嫌か？」

「そんなこと一言も言っていないでしょ。あたしのことはいいから、気にしないで寝たら？」

「そうはいかん、この作戦では、我々の誰一人として欠けることは許されん。」

お前が、冷静な判断と行動が出来ないと困るんだ」

ニートは俯いて、暫くの間黙っていた。

「あんたこそ、眠れないの？」

「ああ、心配なやつが一人いてな・・・、どうにも気になって眠れない」

タウのこの、持って回った言い回しがどうにも気に入らない、ニートは常々そう思っていた。

だがこれが彼の表現の仕方であり、自分の事を気遣ってくれているのだと分かっているから、今はそれをとにかく言う気はない。

「別に・・・、ただね、思い出しちゃったの・・・」

そしてニートは、自分の過去を話し始めた。

ニート・エマンツエは、アルトヴァーレン伯爵領の片田舎にある、山間の小さな町外れの樵の家で生まれた。

幼い頃から活発で、しょっちゅう近所の男の子達と喧嘩をしては両親を困らせていたという。

そんなニートに、その後の彼女に大きな影響を与えることになる事態が発生したのは、彼女が7歳の時だった。

町の側にある山に山賊が逃げ込み、それを追って退治するため、領兵の騎士団が町にやってきたのだ。

剣を手に甲冑に身を包んだその勇壮な出立ちと、泰然自若として物怖じしない態度の男達の集団を見て、彼女は素直に憧れた。

その翌日から、男の子供達の間でチャンバラごっこが大流行したのは言うまでもないが、その中心にいたのはいつも

ニートだった。

ほどなく彼女は、近隣の町の子供達にまで名が知れ渡る程のチャンバラの名手になった。

その後、町の教会が中心となって、山賊の出現に備えて自衛団を組織すべく、退役軍人を雇って町の住人達に戦闘訓練をしてもらうことになり、彼女も勇んで参加した。

日を重ねる毎に腕を上げる彼女を町の人達は頼もしげに眺め、この少女剣士を知らぬ者はいなくなった。

人生の転機は突如として現れる。

その日もニートはいつものように学校帰りに町の教会に出掛け、剣の訓練に勤しんでいた。

そこへ、一人の町衆が慌てて駆け込んできて、こう叫んだ。

「さ、山賊だ！ 山賊が出たぞ！！」

しかもニートの家のある地域らしい。

不安が過ぎった。

ニートは急いで自宅へ向かって走り出した。

家には母親が一人で、樵の仕事に出ている父親と、学校へ行っている自分の帰りを待っているはずだ。

あるいは、仕事を早く終えた父が先に帰っていれば・・・、などと考えながら、しかし不安は払拭出来ない。

彼女は走った。

脇目も振らず、周りの人々の止める声も聞かず、ただただ走った。
<待ってて、お母さん……>

そして、目に映ったのは、この世のものとは思えない惨状だった。
家という家は破壊され、焼かれ、立ち上る炎と黒煙が空を覆い、
太陽を隠している。

人という人は女から老人、子供に至るまで全て殺されていた。
まさに地獄絵図だった。

彼女の両親は……、願いは届かなかった。

燃え盛る家の玄関の前で、母親が……、そしてその上に覆い被
さるように父親が倒れていた。

夥しい量の血の海に取り囲まれて。

ニートはその光景を前に立ち尽くした。

何がどうなっただけでこうなったのか理解出来ずに、ただ呆然と立ち尽
くした。

後を追ってきた町の人々が静かに彼女の肩に手を置いた時、やっと
我に返ってその場にへたり込んで、そして泣いた。

泣きじゃくった。

涙が枯れ果てるまで、いつまでも、いつまでも泣き続けた。

その悲痛なまでの叫びを聞いた人々は、幾日もその声が耳から離
れなかったという。

一生消えることのない心の傷を負ったのは8歳の時だった。

そしていつしか彼女は、両親が死んだのは自分のせいだと思い込
むようになった。

自分がもっと強ければ両親を死なせずに済んだ、そう思い込むこ
とで、何処にぶつけたらいいか分からない怒りと

耐え難い悲しみを自分の中に押し込めようとした。

身寄りを失ったニートを引き取ったのは、その後山賊の掃討に訪

れた領兵騎士団の団長、トロイ・ベーレンシュタルク

という男だった。

トロイ・ベーレンシュタルクは若くして領兵騎士団の団長となった、騎士（der Ritter）の称号を持つ

英雄であり、誰しもが憧れる有名人であった。

ニートは彼の元、アルトヴァーレン伯爵領の領都ナシユカツェで暮らしながら剣の修行を積むことになる。

トロイはニートを養子にしようと思ったが、彼女は養子になることを頑なに拒み、両親の姓たるエマンツェの名を決して捨てようとはしなかった。

その頑固なまでの強い意志に感心したトロイは、それ以降養子の話は一切しなくなったが、2人はそれこそ親子同然のように深い絆で結ばれていた。

次第に元気を取り戻して行った彼女は、トロイの指導の下剣術の修行に明け暮れ、その上達ぶりは教えているトロイ本人でさえ驚くほどだった。

12歳でトロイの弟子として騎士団の訓練に参加するようになる、いつしかその名はアルトヴァーレン伯爵の耳にも入るまでになっていた。

そして14歳の時、史上最年少で領兵の予備役として採用される頃には、領兵の中でも最強を誇る騎士団でさえ敵う者がいなくなる程のレベルに達していた。

だが悲劇は繰り返される。

今度は、山賊討伐に出陣した騎士団が敵の罠に落ちて壊滅的打撃を受け、その中でトロイが戦死したのだ。

英雄の死という現実、アルトヴァーレン伯爵は山賊の撲滅を決意し、全領兵を挙げて一大山賊討伐作戦が決行されることになった。

復讐に燃えるニートは率先して参加した。

もはや、ただ泣いているだけの少女ではなくなっていた。

「泣いているだけでは何も解決しない」というトロイの言葉を思い出しながら、彼女はその思いを剣に乗せ、その活躍

ぶりは文字通り苛烈を極めた。

ある戦闘に於いてなど、戦闘後、部隊に同行している記録係に自分の戦果を報告する際、ニートが口にした言葉は、

「覚えてないわ」の一言だったという。

自分の戦果を記録として残すのは、後に受け取る報奨金の額を正確に算定する論功行賞のために必要な事なのだが、

その時の彼女にとってはどうでもいいことだったのだ。

後に、一緒に戦闘に参加していた同僚が、彼女が斬ったのは9人だったと証言を残している。

結局、数ヶ月に渡って続けられたこの作戦で、彼女が殺した山賊はなんと48人を数えた。

これは驚くべき数字で、千数百名いる全領兵の中でももちろん最多である。

しかし、何人山賊を殺しても、彼女の心の中の傷が、悲しみが癒えることは決してないのだと思ひ知らされた。

こうしてニートは、わずか15歳にして名実共に領兵内で最強と誰もが認めるところとなった。

そして、未亡人となったトロイの妻と、アルトヴァーレン伯爵のたつての希望で、ベーレンシュタルク家の名を継ぐ

ことを決意し、本名をニート・エマンツェ・ベーレンシュタルクと改名した。

ただし本人はその長つたらしい名前を嫌って、普段は昔のままニート・エマンツェと名乗っている。

彼女が護衛連隊の選抜トーナメントへ参加する意思を表明した時、アルトヴァーレン伯は中々承諾しなかったという。

選抜トーナメント参加に際して、彼女が伯爵の推薦状を持参して

いたため、伯爵が勧めたように思われがちだが、
実際はその逆だった。

アルトヴァーレン伯は温厚で柔和な老人で、ニートと面識を持つ
ようになってからは、彼女を孫のように可愛いがって
いた。

手元に置いておきたかった、というのが伯爵の偽らざる気持ちな
のだ。

だがニートは、護衛連隊への志願を取り下げなかった。

それは、領兵として生き続ける限り、山賊との関わりを絶つこと
が出来ないから、というのともう一つ、もっと強く

なりたい、もっと強くなって世界最強になりたいという野心も持
っていた。

タウは絶句した。

ニートにこんな壮絶な過去があつたなんて、思いもよらなかった。
たった16年の人生の中で、2度も親、両親と養父を殺され、し
かもその両方が山賊がらみだったとは。

ここまで山賊に翻弄され続け、人生を狂わされ続けた人間を、彼
は他に知らない。

それをこの16歳の少女は、その大きくもない背中に背負いなが
ら生きているのだ。

一体どれだけ泣いて過ごして来たのだろう。

どれだけ悪夢に魘されて眠れない夜を過ごして来たのだろう。

どれだけ孤独感を味わったのだろう。

彼女が山賊に対して特別な感情を抱くのも無理もない、というよ
りむしろ当然というべきなのだ。

タウは、たいした紆余曲折もない、ある意味平凡な27年間の自
分の人生と比較して自分を恥じた。

「そうか……、そうか、すまなかった……、余計な事

を思い出させてしまったな・・・」

「いいわよ、別に・・・、でも話したらなんかスッキリしちゃった」

そう言いながら顔を上げ、空の星を見上げるニートの横顔は笑っていた。

久しぶりに見る笑顔だった。

どこかさっぱりしたような、ふっきれたような顔にも見える。

しかし、その目からは大粒の涙が止めどなく流れて、月明かりに光っていた。

とはいえ、いつまでも感傷に浸っている訳にも行かない。

ニートがどんなに悲惨な過去を背負っていたようにも、この作戦から彼女を外すことなど到底出来ないのだ。

タウは意を決して冷静にニートに話しかける。

「このまま放っておけば、お前のような思いをする子供が増え続けるんだ、分かるな」

「わかってるわよ、ちゃんとやるから心配しないでよ」

「そうか・・・、分かった、当てにしているからな」

どうやらニートも覚悟を決めたようだ。

そう感じたタウが、背を向けて立ち去ろうとすると、ニートが呼び止めた。

「あ、タウ」

「なんだ？」

「誰にも言わないでよね、今の話」

「ああ、お前が泣いたこともな」

「言ったら絶対ブツ殺すわよ！（赤）」

タウは改めて確信した、この子は強い、と。

そして2日後、準備は全て整った。

いよいよ作戦開始の朝が来た。

宿屋の前には、綺麗に設えられた幌付きの荷馬車が停められ、休養十分で世話の行き届いた馬も頗る元気そうだ。

普通の人にとってはただの日常的な朝の風景も、澄んだ空気も、小鳥の囀りも、この関係者にとっては何か特別な、

そう、このウナギの蒲焼きのような香ばしい特別な匂いが……。

「って！　なんでウナギなのよ！　しかも蒲焼きい！」

ニートが、朝の風景にあまりに不釣り合いなそのウナギの蒲焼きを指差して怒鳴る。

「何を言つかニート、これこそが俺達の秘密兵器なのだ」　パタパタ

平然と答えるタウ。

「だからなんでそれがウナギなのよ！　しかも蒲焼きい！」

「蒲焼きは嫌いか？」　パタパタ

「いや、そういう問題じゃなくて！」

「山賊を誘き出すには最適だとは思わんか」　パタパタ

「なに言ってるんのあんた、意味わかんない！」

「お、ウナギか、いいねー、朝からうな丼か？」　パクツ！

「ヴィリーー！横から食うな！」

「あにおほっへんら、へめー」　ハフハフ

「食べながらしゃべるな！」

「いいかニート、よく考えろ。」

山賊達は、峠を通る商人達がいなくなって、つまり獲物がいなくなつて困っているはずだ。

たまに通つても、堅固な護衛付きでは手も出せない。

だが生きるためには食わねばならない。

食べ物山でも手にはいる。

熊や鹿、兎や狸など、肉はいくらか手を掛ければ容易に手に入るし、山菜もある。

或いは山の一部を開墾して野菜を栽培しているかも知れない。だが、魚はどうだ？

小川があれば多少なりとも川魚は捕れるだろうが、一年中捕れることはない。

川魚は季節や成長に応じて生活場所を移動するものもいるし、なにより数と種類が少ない。

毎日の食卓で、魚介料理のない日など考えられるか、いやない！」　パタパタ

作戦を前に昂揚しているのか、いつになく力説するタウ。

「そお？　あたしは平気だけど」

「オレも、肉があれば後は要らねー」　モグモグ

「ばかを言うな、魚のない食事などあり得るか」　パタパタ

「タウ、あんたオヤジくさいわよ、まだそんな歳でもないくせに、だいたい山賊があんたと同じ魚好きとは限らない、っていい加減パタパタすんな！　煙たい！」

「我慢しろ、ウナギはこうやって七輪で、団扇で扇ぎながら焼くのが鉄則なんだ」　パタパタ

「どつからそんなもん持ってきたのよ！」

「これは村の人達が提供してくれた。

ちなみにウナギは村長自ら川で釣ってきてくれたものだ、天然ものだぞ。

そしてこれが、俺の書いたレシピをもとに、村の婦人会で二日間煮込んで作ったタレだ」　ドン！

「タレまであるんかい！」

「当たり前だ、タレをつけなきゃ白焼きだろ、ここはやっぱり蒲焼きでないといかん。

本当はウチの女房が作ったタレがあれば最高なんだが、あいにく持ってきてないんでな、それが残念だ」

タウは既婚者であり、愛妻家である。

「またカミさんの自慢話か、そこまで言うんならいつペンその料理食わしてみろってんだ」

「いやだ。誰がお前なんぞに食わせるか。」

よし、いい具合に焼け始めた、そろそろ出発するぞ」

「ホントに大丈夫かな、こんなん・・・」

かくして、一行は峠へ向けて馬車を動かした。

いろんな意味で不安を抱えて。

出発してすぐ、空の雲行きが怪しくなってきた。

御者席に座り、馬の手綱を持つクラトラはドキドキソワソワ、何もしないうちから汗をかいて周りをキョロキョロ、見るからに不安でいっぱいな様子。

クラトラはタウの要請した通り、村の人達が用意したいかにも商人風の服装をしているが、あまり似合っているとは言い難い。

それが峠に差し掛かると、さらに恐怖感がプラスされて、もはや心臓バクバクで今にも破裂するのではないかと

思えるほどに激しく鼓動し始めた。

タウが荷台の中から、幌の隙間をちよつと開けてクラトラに話しかける。

「大丈夫ですよクラトラさん、あなたに危害が及ぶことはありません。」

私が保証しますから、心配しないで下さい。

それより、馬の様子に変化があったり、周りに異変があったりした時はすぐに声をかけて下さい」

「わ、わ、わ、分かったス・・・（汗）」

幾分落ち着きを取り戻した様子のクラトラを見て、タウは再び幌の中に姿を隠す。

「ホントに大丈夫か？ あのおっさん」

「心配ない、あの人なら上手くやってくれる。」

それに、これから俺達が出会う山賊は人を襲わない、狙うのは積み荷だけだ」

「それより、早くなんとかしてよ、この煙・・・ゲホッ」

ニートが文句を言うのも至極当然。

幌の中はウナギを焼く煙が充満して真っ白になっていて、目の前の視界すら遮られる状態で、耐え難いほど煙たい。

「よし、そろそろいいだろう。」

アイヒ、後ろの幌を少し開けて煙を外へだしてくれ」

「ハッイ」

荷台の後方に座っているアイヒは幌を半開きにして、手に持っている団扇で煙を扇いだ。 バタバタ

「ちょ、ちよつとアイヒ、ちゃんと外向けて扇いでよ・・・ゲホゲホ」

「あははは、おもしろいゲホゲホッ・・・」

「やってる自分が噎せるなっ！ゲホッ」

煙が外へ出始めると、タウはウナギにタレを塗り始めた。

ジュワーツという音と共に香ばしい香りがたちこめ、それが煙に乗って外へ流れ出して行く。

荷馬車は少しずつ、大木が立ち並ぶ峠の奥へと向かって行く。

ウナギの蒲焼きの甘く香ばしい香りを振りまきながら。

この期に及んでもなお、ニートは信じられないでいる。

「本当に引つ掛かるの？こんなんで」

それに反してタウは絶対の自信を持っている。

「釣れる、必ず釣れる。 これで釣れなきや、やつらは人間じゃない！」

「断言しちゃったよ、この人・・・」

その時、御者席の方から震えた声が聞こえてきた。

「ぐ、ぐ、ぐ、軍曹さん……（汗）」

「どうした！？ クラトラーさん！」

「う、馬の様子が……、お、おかしいだス……（汗）」

「何！？ 馬が！（汗）」

全員に緊張感が走る。

幌の隙間から覗くと、確かに馬の様子が変だ。

頭を左右に振りながら、鼻をフガフガ……。

「って、ウナギの匂いに釣られちゃってるんじゃない！ 馬釣って

どうすんのよ！」

それを聞いてアイヒがキョトンとする。

「え？ 馬でウサギさんを釣るんですか？」

「釣らない！ って言うか釣れない！ どうやって釣るのよ！」

タウがニートを止める。

「しっ、静かにしろ。」

「どうやら釣られたのは馬だけではなさそうだ」

タウは、道の両側にそそり立つ大木の足元に広がる藪の中の変化を見逃さなかった。

静寂……。

聞こえるのは馬の蹄と車輪、馬車の軋む音だけ。

パツと見はいたって普通の山の風景なのだが……。

「近いな……。

みんな準備しろ、クラトラーさんは、連中が現れたらすぐ馬車から飛び降り、村の方へ走って下さい。

ニートは万一に備えて、クラトラーさんが安全な所に行くまで後に続け。

アイヒは馬車で待機、ヴィリーは……、好き放題に暴れて構わんが、深追いだけはするな」

「よっしゃ！ 待ってましたただ、その言葉！」

1分経過……。

2分経過・・・・・・・・。

3分経過・・・・・・・・・・変化なし。

ヴィリーが痺れを切らしたその時、「うおりゃー!」「でゃー!」などという野太い叫びと共に、道の両側から複数の山賊が勢いよく飛び出してきた。

それを見たクラトラは慌てふためいて声を上げた。

「うわっ! 出た! 出ただー!! (汗)」

そして馬車を飛び降りると一目散に、今来た道に戻って走り出した。

それを合図に一行は即座に反応、荷台の幌を開けて真っ先にヴィリーが飛び出し、近付いてきた山賊の一人を斬りつけた。

「とりゃー!」ズバツ!

続いて飛び降りたニートが、クラトラの背後をフォローして走り出す。

タウは荷馬車の前方から幌の外へ出ると、空になった御者席の上から走り寄る賊に向かって剣を振るう。スパツ!

突然飛び出した剣士に驚いた残りの賊達は、慌てて大声を上げながら逃げ出す。

「わ、畏だっ! 畏だー!」

「退けー!」

タウが後方に向かって叫ぶ。

「ヴィリー! 逃がすな!」

「任せろ!」

ヴィリーは敵を追って山へ突進。

タウもまた、散り散りになって逃げる賊を追って山へ入って行く。

山へ入ってすぐ、ヴィリーは後ろに人の気配を感じた。 ガサガサッ！

「！」

すると、前にいた、逃げていた賊の男も立ち止まって振り返った。汚いヒゲ面が不敵な笑みを浮かべている。

どうやら挟撃する気のようなのだ。

山賊達もバカではない。

振り返りに遭った時のために、普段から準備は怠りなかった。

それぞれバラバラに逃げれば、追ってくる敵もまたバラバラにならざるを得ない。

そうして山の中へ誘い込んでおいて、一人になった敵を回り込んだ仲間と共に挟み撃ちにしてみようという考えだ。

ヴィリーはまんまとその策に嵌められた形になった訳だが、当のヴィリーにとってはどうでもいい事だった。

ヴィリーはとにかく勝手放題に暴れまくりただけで、それに文句をつけるような仲間など、いてくれない方が都合が

いいのだ。

ヴィリーを前後から挟んだ賊は、剣を手に身構え、じりじりと間を詰めてくる。

だがヴィリーは全く動じない。

萎縮するどころか、逆に全身の血が沸き立つような興奮に包まれていた。

いきなり前にいる男が、剣を振りかざして斬りかかってくる。

「うおーっ！」

だがこれが威嚇であることは、ヴィリーにはお見通しだった。

ヴィリーは剣を真っ向から剣で受けることはせず、サツと身かわし、男が振り下ろした剣を受け流すようにして、

その剣と同じ方向に向かって力まかせに自分の剣を振るう。

「うおりゃっ！」 ガキッ！

男の剣は、ヴィリーの剣に押されて勢いを加速され、近くの木の幹に当たって食い込んでしまう。「うわっ！」ガシ！

ヴィリーはそのままの勢いで体を半回転させ、背後から斬りつけようとしていたもう一人の男に斬りかかる。ブン！

後ろにいた男はヴィリーの素早い動きに反応出来ず、右の脇の下辺りを斬られてしまう。ズパッ！

「うわぁー！」

更に体を半回転させたヴィリーは、手前にいた男に向かって剣を振り下ろす。ビュンッ！

幹に食い込んだ剣を手放すことで、辛うじてヴィリーの攻撃をかわした男は、剣を残して手ぶらで逃げだした。

「うわーっ！（汗）」

「バカめ！ このオレ様を斬ろうなんて100万年早いつてんだ！ 待てこのヤロー！」

勢いに乗ったヴィリーは男を追いかけて山の中を奥へ、藪を飛び跳ねるように怒濤の如く突き進んで行く。

普段から高言しているだけあって、さすがに隊員選抜トーナメント8位の成績は伊達ではない。

体を一回転させる間に、挟撃する2人の男を迎撃する離れ業を演じて退けた。

ヴィリーはこうした単独戦に於いてこそ、その本領を発揮させる。そもそも、敵を分散させて各個撃破するというのは、用兵学上の基本戦術の一つであり、敵の戦力を削ぐには有効な手段ではあるのだが、こと第7小隊に対しては、この戦法は全くもって意味を為さない。

第7小隊のメンツ、特にヴィリーには、仲間同士による連携など始めから念頭にない、個人プレー主体なのだから。

一方、クラトラーの後方を警戒していたニートは、クラトラーが

無事に山の麓まで逃げ延びるのを確認すると、踵を

返して荷馬車のある現場へ急いで走っていた。

近付くにつれて聞こえてくるアイヒのキヤーキヤー叫ぶ声。

「！、アイヒ！（汗）」

アイヒが山賊に襲われている！、そう思うと、ニートの脳裏に忌まわしい過去の光景が蘇ってくる。

「待っててアイヒ、今行くから・・・、絶対死んじゃダメよ！（汗）」

アイヒは、タウから強力な破壊魔術の使用を堅く禁じられていた。微弱な電撃等は認められたが、だがその程度では荷馬車を取り囲むように藪の中に潜む7、8人の山賊を相手にするには不十分であると言わざるを得ない。

一人ぼっちになって心細くなってしまったせいか、完全に萎縮してしまつて、いつものアイヒらしい澁刺とした動きは影を潜めて、ビクビクしているように見えた。

賊達は、それぞれ藪の中をガサガサ音を立てながら移動し、その都度アイヒはキヤーキヤー言いながら電撃を放つの

だが、致命的損傷を与えるには至らない。それを延々繰り返すのだ。

最初のうちは的確に賊を捉えていた電撃も、アイヒに疲れが見え始めると次第に狙いを外すようになり、威力も落ちてくる。

賊達はそれを待っていた。

魔術を駆使用する者を相手にするには、無駄に魔力を浪費させ、疲れさせるのが最も賢い方法である。

もともと持久力に問題があるアイヒにとっては、最悪の事態と言ってもいい。

今のアイヒには、もはや敵の動きを目で追うことすらかなわない。

その愛らしい顔にも、誰が見ても分かる程、疲労の色が濃く反映されてきていた。　ハアハア・・・（汗）

そして、敵の動きを追って振り返った時、足が纏れて転びそうになる。　フラ・・・

「あっ・・・（汗）」

その時、それを待っていたかのように一人の賊が藪の中から飛び出し、アイヒに向かって剣を振り下ろす。

「どりゃーっ！」　ブン！

「キヤーツ！（汗）」

その場に倒れ込むアイヒ。

まさにその瞬間、反対の藪の中から黒い物体が目にも留まらぬ速さで飛び出すと、賊に体当たりした。　ドンッ！

「ぐわあっ！」

妙な声を上げて倒れ込む賊の男、その体の上には一匹の狼が！

狼はものの見事に男の喉に喰らい付いており、その鋭利な牙を深く突き刺しながら、周りに潜んで攻撃のタイミングを

計っていた他の賊達へ、鋭い目を向け威嚇している。　ガルルル

「ワンちゃん！」

アイヒは思わず声を上げた。

その狼はあの時、スライムに襲われて瀕死の状態だったところをアイヒによって救われた、あのワンちゃんだった。

スライムに群れの仲間を全滅させられ、天涯孤独の身となったワンちゃん、縄張りを捨て、命の恩人であるアイヒを

慕って、匂いを頼りにここまで追ってきたのだ。

九死に一生を得るとはこのことか。

アイヒはワンちゃんに駆け寄って、縋り付くように抱き締めた。

「ワンちゃん、ワンちゃん！　うえーん（泣）」

それでもアイヒの危機に変わりはない。

突然の狼の出現に驚き、タイミングを逸した賊達は、ヒュッとい

う口笛の合図のもと、ここぞとばかりに一斉に藪から

飛び出してアイヒに襲いかかってきた。

これではワンちゃんも太刀打ち出来ない。

しかし、一度失った好機は戻らない。

そこへ絶好のタイミングでニートが駆け付けたのだ。

「アイヒーツ！」

ニートは一番近い男に向かって斬りつける。 ビュンッ！

「うおわっ！」っと男は間一髪でそれを避けたはず・・・、なの

だが、スパッ！ 「ぐえっ！」

男の体は真つ二つに切断された。

啞然とする賊達（汗）。

「フン」

ニートは不敵に笑うと、すぐに次の男に照準を合わせてダッシュ！

「うわあっ！」

狙われた男は慌てて逃げ出そうとするが、ニートの刀には間合いを詰める必要がない。

狙いを定めて振り抜けば、たとえ10m離れていようがお構いなしに両断する。 スパッ！ 「ぐわっ！」

これは、彼女の持つ魔剣ヴィンデスアイルが、風を操る魔術を封じ込められている刀だからであり、言わば鎌鼬を

飼っているようなものなのだが、この時はまだ誰もそれを知らない。

しかもその威力は、ニート自身の精神力によって大きく左右されるのにも拘わらず、彼女は全く気にしていない。

「アイヒに手出したらタダじゃおかないわよ！」

そう叫んで道の真ん中で仁王立ちするニートの、それは決意表明だったのかも知れない。

もう二度と、あんな思いはしないという。

「な、なんだこの女・・・（汗）」

「けつ、構うこたあねえ！ 一斉にかかるぞ！」 ダッ！
ここからは圧巻の一言に尽きる。

男達に取り囲まれるニート、数の上では圧倒的に不利な状況にあるにも拘わらず、鍛え上げたその腕と魔剣の力で、

道の側に生えている大木もろとも賊を片っ端から斬り捨てていく。力の差は歴然としていた。

これではまるで大人と子供の喧嘩の如くだが、ニートに容赦はない。

それこそ無慈悲なまでに冷徹に。

男達はニートの身軽な動きに対応しきれず、攻め倦ね、逃げ惑い、そして斬られ、息絶えていった。

雨が降り出していた。

タウが山から下りてきた時、目にしたのは道一面に広がる血の海と、そこに横たわる複数の山賊の亡骸だった。

それとその海の直中で、雨に打たれてひとり佇むニートの姿だった。

「よくやったなニート、大丈夫か？」

「別に、なんともないわ」

タウが声をかけると、ニートはまるでタウを無視するように平然とした顔で刀を鞘に収めた。 カチャ

そして荷馬車の中に退避しているアイヒのもとへ向かう。

その横顔の、頬を伝うのは雨か、涙か。

「アイヒ、大丈夫？」

「はい、ありがとうございます」

「あれ？ これは・・・ワンちゃん？」

「ハイ、助けにきてくれたんです！」 ワン！

「へえ、すごいねワンちゃん」（撫で撫で）ワン！
そこへタウがくる。

「お、これはあの時の狼か？」

「ハイ」 ワン！

「命の恩人なんですってよ」

「そうか、じゃあしつかり面倒見てやらんといかな、アイヒ」
「ハゝイ」

3人が待つ荷馬車へヴィリーが戻って来たのは、それから暫く経ってからだった。

「うへー、ずぶ濡れだぜちきしょー」

「お、ご苦労だったな、成果はどうだ？」

「へへ、3人始末してやったぜ。お前はどーなんだ、ニート」

「あたし？ 6人よ」

「ケ・・・、ケツ！ オレだって雨が降らなきゃあと2、3人くらい・・・（汗）」

「いいや、それでいい、深追いは禁物だ。 全員揃ったから、一度村に引き返すぞ」

「なに？ 山賊はまだ全滅してないぜ」

「いいんだ、当初の目的は達成した。 後は出直してからだ」

村へ戻ると、村人が総出で出迎えてくれた。

それはそれは一行が驚く程盛大で、村長などは祝宴を挙げるとまで言い出す始末。

しかしタウは、作戦は継続中であると言い、宴会を断った。

その日の夜、食堂で少し豪華な夕食をとる小隊のメンバー、とワンちゃん。

ここ数日、減退ぎみだったニートの食欲が復活した。

ニートはその小柄な体格に似合わず大食で、普通に2、3人前は食べる。

この日も3人前をペロリとたいらげた上に、アイヒと一緒にデザ

ートのプリンまで口にした。

驚いたのは食堂の主人。

「姉ちゃん、すげー食欲だべな」

「そお？ これくらいいつもだけど」 ぱく

「いやー、ワスも長いことこの商売やってっけど、こんだだいいえ食う人なんざ、男でもそうそういねえだべ」

ヴィリーが茶化して言う。

「気にすんなじいさん、こいつは胃袋を5つ持ってんだ。 燃費の悪さだけは天下一品だぜ」

「人を牛みたいに言うな！」

「今“強欲な壺”が発動中なんです」

「アイヒ、あんたまで・・・（汗）」

そこに、バナールを先頭にプレートマン騎士団（？）が入ってくる。

バナールが小隊の労をねぎらい、第一声を上げる。

「みなさん、今日はご苦勞様でした。 全員無事でなによりです。首尾はいかがでしたか？」

タウが答える。

「私の分と合わせて、全部で11人退治しました」

「それはすごい！ 賊の半分以上ですね」

「ただ、首領のダウスは取り逃がしたようです。

ですがまあ、これで組織だった行動は不可能になったと思っていいでしょう」

「そうですね、恐らく残っているのは5、6人くらいでしょうか」

それを聞いたナウケが念を押すように口を挟む。

「つまり、奴等が反撃してくることはないと言っのだな」

自分は何もしていないのに、やけに偉そうな態度だが、タウは気にせず答える。

「その可能性は低いでしょう。

ただでさえ少ない人数で、しかも地の利のある山を下りるとは考えにくいですから」

「では、奴等はどう動くとお考えですか？」

「恐らく、暫くは山の奥に籠もるでしょう。

奴等は相当警戒心を強くしているはずですよ。

できればそのまま山を離れてくれればいいのですがね」

「まったくですね」

その日は久々の実戦ということもあり、小隊のメンバーは皆疲れていたので、今後の作戦の立案と展開は翌日ということになった。

そして翌日、再び食堂に集結した第7小隊とブレートマン騎士団（？）の面々は、次なる作戦を立案するための会議を開いた。

進行役のバナルが挨拶もそこそこに話し始める。

「皆さん昨日は大変お疲れ様でした。

さっそくですが、今後の方針を、軍曹さんの方からお聞かせ下さい」

指名されたタウが答える。

「まず・・・、暫くは動かないことですね」

「動かないだと？」

ナウケが不満げな顔をする。

「そうです、というか動けないと言っべきでしょう」

タウはサラッと受け流す。

「何故だ、何故動かぬのだ？」

折角第一陣を成功させたというのに、ここはその機に乗じて一気に攻勢に出るべきではないのか。

今こそ敵を殲滅すべき時ではないか！」

「それは出来ません。」

敵は更なる攻撃を警戒して山の中にトラップを仕掛けている、
と考えるべきでしょう。

山へ入るのは得策とは言えません」

「では、どうせよと言うのだ？」

「ですから今は動かぬことです。」

敵を倒すには誘き出す以外に方法はない、しかし同じ手に二度
もかかる程、敵も愚かではない。

別の戦術を使うにしろ、少し間を置かねば徒労に終わる公算が
強くなるだけです」

「そんな及び腰でよいのか！ 機を見るに敏となすという言葉も
あろう！」

タウの素っ気ない態度が気に入らなかったのか、ナウケはやけに
食い下がる。

そんなナウケに嫌気が差したニートが言う。

「だったら一人でやんなさいよ。 あんた何もやってないんだか
ら」

その冷たく突き放すような一言にナウケは言葉を失う。

「う……（汗）」

代わってタントが声を上げる。

「小娘！ 言葉を慎まんか！」

ナウケが慌てて止める。

「いいんだ、爺、この人の言う通りだ……」

ニートの一喝で、意気消沈したナウケは素直に引き下がった。

バナールが提案する。

「敵の警戒心を逆手に取る、という方法はありませんか？」

「方法はあるのですが、それには人手が必要になるでしょう
ね。」

それも周到に訓練された人手が。

この人数では、とても無理です」

「やはり、だめですか・・・」

「そこで別の方法はないかと色々考えているのですが、ここで問題になるのは、もう一つの凶悪なグループの方です」

「そうか、もう一つグループがあっただんですね」

「どうせならいっその事、この2つのグループを同士討ちさせることが出来れば、と思ってるんですがね」

「なるほど、同士討ちですか、それは名案ですね」

「2つのグループは、それぞれ襲撃の方法が違うという話がありました、そもそも何故一つの峠に複数のグループが存在するのか。」

つまり、元々は一つの集団だった物が、何かしら意見の食い違いを起こして分裂した、と考えれば合点がいきます」

「要するに、2つのグループは仲が悪いと」

「そうです。」

もし、お互いに争っているのであれば、上手くそれを利用出来ないものかと思ってるんですが、具体的にはまだ何も

考えていません」

「素晴らしい！ 成功すれば一石二鳥ですね」

「しかし、昨日の今日ですからね。」

いずれにしろ少し間をおかないと、どんな作戦も功を奏することはないでしょう」

タウとバナールがそんな会話をしている時、同席している村長と宿屋の主人が2人でボソボソ何かを話していた。

「そろそろ定期便がくる頃じゃな」

「そうだな、もうすぐだべ」

タウがそれに気付いて聞き返す。

「定期便？」

「んだ、月に1回、港に荷揚げされた品物を運ぶ荷馬車が、峠を通ってくるだ」

「峠を？　では護衛付きですね」

「んだ、なにせ金銀宝石やら高い服やら、貴族の人達が身に付けるような、おったまげる程高いモンばかり積んでくるだよ」

村長が補足する。

「そんだだ荷馬車がいっぺんに3台も4台も連なって来るんじゃないよ。」

「この宿屋にはいいお客さんじゃ」

「もうすぐって、後どれくらいですか？」

「そうじゃな・・・、あと3、4日もすれば来るじゃろて」

「あと3、4日・・・」

ここでタウは考え込んだ。

それを見てバナルが話しかける。

「これは利用しない手はありませんよ、軍曹さん」

「まあ、向こうと連絡が取れて折り合いがつけばの話ですが・・・、
とはいえあと3、4日では・・・。」

もう暫く考えてみましょう」

というわけで、その日は一日オフになった。

メンバーは各々、好きなように時間をすごしていた。

ヴィリーは、旅籠に集まった村の老人や子供達を前に、ドラゴン退治の武勇伝等を話して聞かせている。

さも自分の手柄のように、しかもいろいろ脚色を加えて。

その旅籠の裏庭で、アイヒとニートはワンちゃんとじゃれ合っていた。

ワンちゃんは完全にアイヒに懐いており、草の上に寝転んで腹を見せ、アイヒに撫でられてゴロゴロしている様は、
どう見てもただの犬だ。

その側でしゃがんで見ているニートがアイヒに言う。

「ねえアイヒ、名前変えようよ、ワンちゃんの」

「え、なんですか？」

「なんかこう・・・、もっと強そうなのによつよ、オオカミなんだし。」

ワンちゃんだと、なんだかどつかのスポーツ選手みたいじゃない」

「いいんです、ワンちゃんで」

そこへナウケが、もじもじしながら一歩ずつゆっくり近付いてくる。

それを見つけたアイヒが声を上げた。

「あ、坊ちゃんだ」

自分の方から声を掛けようと思ってタイミングを見計らっていたナウケは、相手に先に声を掛けられて焦り、慌てて

挨拶をする。

「や、やあ・・・、い、いい天気だね・・・（汗）」

愛想よくニコニコ笑うアイヒとは対照的に、ニートは素っ気ない。

「なんか用？」

「い、いやあ・・・、よかったら話でもどうかと思って・・・

（汗）」

「別に、話すことなんてないわよ」

「・・・（汗）」

取り付く島がない。

ニートはナウケに全く関心がない、というか、はっきり言って嫌っている。

ナウケのような、なよなよした他力本願の見本のような男に、ニートが好意を寄せるわけがない。

そのことにすら気付かないナウケは、なんとかニートの気を引こうと必死になっている。

「あのさ・・・、なんか・・・好きな物とかないのかな？（汗）」

「ニートさんは食べ物大好きです！」

「アイヒ！ 余計なこと言わなくていいの！」

「あ、それから王子様も好きですよ」

「アイヒーッ！！（汗）」

焦って声が裏返るニート。

「あんた、誰に聞いたの！？（赤）」

「ヴィリーさんです・・・、あ、秘密だって言われてたんだっけ」

「あんのバカヤロー・・・（汗）」

ニートは真っ赤な顔をして額に脂汗をにじませながら、拳をギュ
ッと握った。

「お、王子様・・・って、もしかしてミトライト皇太子殿下！・・・
（驚）」

ナウケは驚き、たじろいで2、3歩後退りした。

ミトライト皇太子とは、その名の通り国王エーゼル三世の19歳
になる長子である。

この時ナウケは、ニートが皇太子と面識があるものと勘違いして
しまった。

アイヒがあまりにもあつさりと王子の名を口にしていたのがその要因
だが、やはり王都に住む護衛連隊員ともなれば、その

くらいは当たり前なのだと、咄嗟に思い込んでしまったのだろう。

ナウケの頭の中に、ニートと皇太子が仲睦まじく散歩したり、食
事したり、ダンスを踊っている光景が浮かぶ。

皇太子の名を出されては、ナウケといえども後ろへ引かざるを得
ない。

相手は王族の、しかも皇太子である。

一地方貴族の息子などが到底敵うはずもない。

聞かなければ良かった、と後悔してももう遅い。

ナウケは肩を落として静かにその場を離れることしか出来なかつ

た。 トボトボ・・・

「あれ？、行っちゃいましたよ、坊ちゃん」

「放つとけがいいのよ」

ニートは全く意に介さず、むしろ厄介払い出来て清々した。

それから3日が経った。

タウとバナールは連日、次なる作戦の立案のため話し合っていたが、未だに良策が見出せずにいた。

港からの定期便は、今日か明日にも峠を越えるはずだ。

バナールの表情には焦りの色が見え隠れし始めていたが、ある程度時間を置くべきだと考えているタウの方は存外
気楽に構えていた。

しかし、昼近くになって予期せぬ事態が発生する。

一行の宿泊する宿屋に、村長を尋ねて一人の老人が血相を変えて飛び込んできた。

「そ、村長さん！ 大変だべ、村長さん！（汗）」

そのあまりの慌てぶりに驚く村長と一同。

「どうした！？ なにごとじゃ！」

「ネ、ネーレンところの娘っ子が・・・ひ、一人で峠に入って行っただよ！（汗）」

「な、なんじゃとっ！！（驚）」

「ど、どういうことですか！？」

村長の横にいたバナールが、何が起こったのか尋ねる。

宿屋の主人に水をもらって一息ついた老人が、話し始めた内容を要約すると次のようになる。

村の最も峠寄りの辺りに樵のネーレン一家が住んでいた。

主人のネーレンは出稼ぎに出ていて、家には妻のリュットと4歳になる娘のマリーレが2人で暮らしていた。

朝から畑で野良仕事をしていたリュットは、その最中運悪く足を蛇に噛まれてしまう。

近くの畑にいた人達の助けでどうにか家まで辿り着いたが、どうやら彼女を噛んだのは毒蛇だったようで、彼女は家に

着くなり倒れ込んで、次第に高い発熱に見舞われ始めた。

早く毒消しを処方しなければ彼女の命が危うい。

だが医者と呼ぶにしても、一番近い医者は峠の向こう、ホフアート子爵領に行かねばならない。

家に集まった近所の人達のそうした会話を、娘のマリーレは泣き出しそうな顔つきで聞いていた。

そして気付いた時には、マリーレの姿が見えなくなっていた。

家の付近を探した人達は、通り掛かった農夫から、マリーレらしき子供が峠の方へ走って行くのを見たと言われ、

急いで村長の元へ報告に来た、という訳だ。

「4歳の子が峠に！！（汗）」

驚きの声を上げるバナール。

前回の作戦以降、峠には表立った変化は見られないが、それは山賊がいなくなった事を意味するものではない。

賊の生き残り達は、新たな襲撃に備えて山の中に潜んでいるだろうし、仲間を殺されて復讐に燃えているだろうから、

峠に見張りを付けているのは間違いない。

加えてもう一つのグループが、次は自分達が狙われる番だと戦々恐々としているか、或いは返り討ちにしてやろうと

手ぐすね引いて待っているか、いずれにしても、今峠を通ることは極度の危険を伴う。

彼等は、たとえ4歳の子供といえども容赦はしないだろう。

ニートは無言ですつくと立ち上がり、刀を手取るなり玄関へ向

かつて走り出す。

「おい、どこ行くんた、てめー」

ヴィリーが声をかけると、険しい表情でニートが振り返る。

「バカ！ 助けに行くに決まってんでしょ！」

続いてタウが立ち上がる。

「待てニート、走っていても間に合わん、今すぐ馬車を出す」

馬車は峠に差し掛かった。

しかし子供の姿は見えない。

タウは、馬車を奥へ奥へと走らせた。

暫く行くと、馬車の前を走っていたワンちゃんがけたたましく吠え始めた。　ワンワン！

それにタウが機敏に反応して馬車を止めると、すぐに荷台からニートとヴィリーが飛び降りる。

だが、周りに人の気配はない。

ただの静かな山の風景がそこにあるだけだ。

それでもワンちゃんは、峠道の先の方を向いたまま断続的に吠え続けている。　ワンワン！

一行が緊張しながら様子を窺っていると、峠の向こうから何やら人影のようなものが見え始めた。

「誰か来るぜ！」

最初に気付いたヴィリーがそう言うと、ニートは刀を抜いてその人影に向かって一直線に走り出した。　ダダッ！

「焦るなっ！ニート！」

タウが制止する間もなく、ワンちゃん、ヴィリーがそれに続く。

近付くにつれ、その人影の姿形が次第に見えてきた。

それは190cmはあるかという大男だった。

男はゆっくりと、こっちに向かって歩いて来る。

手入れもせず、伸び放題のチリチリの髪と髭、着古したボロボロの服の上に、熊や鹿の毛皮で作った上着を着て、腰には剣をぶら下げている。

まるで熊が立って歩いているようでもあるが、誰がどう見ても山賊だ。

そしてその大男は、腕に小さな女の子を抱き抱えていた！その光景を見て逆上したニートは、走りながら叫んだ。

「その子を放せ！ この外道！」

すると男は立ち止まり、女の子を抱いている手とは逆の、右手をゆっくりと上に挙げた。

どうやら武器は持っていない、戦う気はないという意味を表現したいらしい。

それを察知したタウは急いでニートを止める。

「やめるニート！ ヤツに戦う意志はない！」

ニートは、男の10mほど手前で足を止めた。 ザザザッ

だが手にした刀は納めていない。

「その子を放しなさい、ブツ殺すわよ！」

男はやおら言葉を口にした。

「話はこの子から聞いている。 蛇の毒消しなら俺が持っている」

「なんですって!？」

「医者と呼ぶより俺の方が早い。 急ぐんなら、道を空けてくれ」低い落ち着いた声で話す男は毛むくじやらの顔、太い眉の奥の目つきは鋭く、その悪人面からは表情が読み取れない。

とてもではないが、そんな何を考えているのか分からない男の言葉など、にわかには信じられない。

ニートに追いついたタウが話に加わる。

「このまま村へ行っても、お前の命の保証はないぞ」

男はタウを見たまま、一瞬止まった。

タウの言葉には、男を躊躇させるに足る重みがあったのだ。

「俺のことは構わん。それよりこの子の母親の方が大事だろう」
その言葉を聞き、男の目を見て何かを感じ取ったタウは即決する。
「……………、分かった、一緒に来てもらおう」

この判断にニートが異を唱え、ヴィリーも同調する。

「タウ！　こんなやつと言う事信じるの！？　山賊なのよこいつ！」

「そうだぜ、ホントに毒消し持つてるのかも怪しいもんだぜ」

「長いこと山で暮らしていれば、蛇の毒消しの一つや二つは常備
していて当然だ。」

今は一刻を争うんだ、助けられるんなら誰の手でも借りる」

「だったら毒消しだけもらって、こいつはここでブツ殺しちまおうぜ」

「そうはいかん、この男には聞きたいことが色々あるんだ、死な
れてたまるか」

厳しい口調でそう言って、なかば強引に2人を説き伏せたタウは、
今度は男に向かって言う。

「その子と剣を渡してもらおうか、そしたらすぐに馬車に乗って
くれ」

こうして村へ引き返した一行は、無事に毒消しを処方して、リュ
ットは一命を取り留めた。

そして男は身柄を拘束され、タウ等一行の管理下に置かれること
となった。

宿屋の中にある薄暗い物置に隔離された男にタウが質問するのを、
他のメンバーは静かに見守っていた。

「お前、名前は何と言う？」

「ダウスだ」

「お前がダウスか」

「そうだ、お前達が俺達を退治に来た軍隊か」

「まあな。仲間はどうしてる、まだいるんだろ？」

「山の隠れ処にいるはずだが」

「何人？」

「5人だ、・・・殺すのか」

「そうだな、それはお前達次第だな。まだあの山で山賊を続けるのであれば、そうせざるを得んだろう」

「そうか・・・、だろうな・・・、だが俺達はもううんざりなんだ」

「うんざり？」

「そうだ、俺達はもう山賊なんてやりたくはないんだ。

今回の件で仲間を失って、益々はつきりした。

襲撃を受けたあの日から、俺達はずっと話し合ってきた・・・、もう潮時だろうってな・・・。

だが・・・、その後何をやってたらい・・・。

「前は何をやってたんだ？ お前等軍人じゃないだろ。

色々考えていたようだが、戦い方は素人に毛が生えたようなものだった。

まあ、プロの軍人でもニートやヴィリーに太刀打ち出来る者は、そうはいないだろうがな」

「やはりプロフェッショナルには敵わないか・・・。俺達は皆、ムレーネ海で魚を獲る漁師仲間だった」

「漁師？ ホファート子爵領でか？ それがなんで山賊なんぞに成り下がった？」

「そのホファート子爵様のせいだよ」

「なんだと？」

「あれは・・・、もう2年以上前のことになるか・・・。

ある日、外国船が入る大きな港だけでなく、俺達のいた小さな

漁港にまで港湾管理局の役人が来て、今後は港に

揚がる全ての物品に関税をかけると言ってきた。

魚介類も例外なくだ。

その上、更に港湾使用税も徴収すると。

少ない稼ぎで日々暮らしてきた俺達は、それでは仕事が出来なくなる」

「なんだそれは、魚も輸入品扱いか」

側で聞いていたバナルが口を開いて、補足するように説明した。

「聞いたことがあります、物流統制の一環ですね。」

ホフアート子爵は、以前から領内全ての物流を管理統制しようと画策していました。

それは密輸や違法な商取引などを摘発し易くし、結果としてそれらを抑制するという良い側面もあるのですが、

それはあくまで対面的なことで、子爵の目的はそこにはありません。

要は確実な税収の確保です。

私がいた頃はまだ計画の段階でしたが、それが実現しているとすれば、相当な収入源になっているでしょう」

「俺達のような、個人営業の漁師は皆廃業したよ。だから俺達は、家族も仕事も捨てたんだ。」

そして復讐してやろうと考えた・・・、だが出来なかった」

ヴィリーが吐き捨てるように言う。

「それで山賊か？ 情けねー」

「俺達だつてやりたくはなかった。だが他に選択肢はなかった。血の気の多いやつらの暴走を止める方法も考えなければならなかったし・・・」

ヴィリーの言う通り、どんな言葉を連ねようとも山賊に同情の余地などない、と誰もが思っていた。

だが、口にこそしなかったが、ホフアート子爵領で苦汁を舐めた

経験のあるバナールには、少なからずダウスに共感出来る思いがあったことは否めない。

ここでタウは、最も知りたいと思っていた領域に踏み込んだ。

「元々お前等の仲間は最初は何人いたんだ？」

「何？」

「峠にはもう一つ山賊がいるだろう、あれはお前等の仲間だったのではないか？」

この質問を聞いたダウスは、それまでの冷静で落ち着いた態度を翻して、急に語気を荒げた。

「バカを言うな！ あんな奴等と一緒にするな！」

奴等は人間じゃない、人殺しをなんとも思っていない最低の連中だ！」

「仲間ではないのか？」

「当たり前だ、奴等は傭兵だぞ」

「傭兵！？」

「そうだ、奴等は元々、通商馬車が俺達に襲われないようホフア―ト子爵が雇った傭兵だったんだ。

いや、今でもそうだ。

俺達も一度、峠で奴等とかち合って仲間を何人も殺された」

バナールが驚いて聞き返す。

「ち、ちよつと待って下さい。

馬車を護衛するために雇われた傭兵が、馬車を襲っているというのですか！？（汗）」

「そうだ。

だから奴等は証拠を残さないために、御者も含めて馬車に乗っている全員を殺して、積み荷を全て奪う。

俺達の仕業に見せかけるためだが、俺達はそんな残酷なことはない、根本から違うんだ」

「そ、そんなバカな・・・（汗）」

信じられないという表情をするバナール。

しかしタウの方は冷静だった。

「いえ、辻褄が合いますよ。」

これで、その連中がホファート子爵側から峠に入る馬車しか襲わない理由に説明がつく。

連中は事前に積み荷の中身が何であるかを知ることが出来て、それで襲うか否かを決めていたんです」

「な、なるほど……、確かに……（汗）」

「と言うことは、つまり奴等はお前等のように山で生活しているのではないのだな？」

「当然だ、あんな奴等と同じ山で暮らせるか！」

ヴィリーがボソツと、素朴な疑問を口にした。

「もうすぐ定期便が来るんじゃないのか、襲われねーのか？」

「俺達は定期便は襲わない。」

俺達は生活に必要なもの以外は狙わないようにしてきた」

「私の調査でも、これまでに定期便が襲撃されたという話は聞いていません。」

彼等自身が護衛しているのですから、それは無理でしょう」

ダウスの発言を受けて、バナールは自信を持ってそう答えたが、タウは些か違う見解を持っていた。

「それでも安心は出来んでしょう、そうだろう？」

そう言つてダウスの顔を見ると、ダウスも同意した。

「その通りだ。」

俺達は常に峠に見張りをつけていたが、馬車を護衛してきた奴等が急に態度を変えて馬車を襲う、という場面を

何度も目撃した。

奴等が護衛しているから安心というのは、事実を知らない連中の過信でしかない」

「他に、奴等について知っている事はないのか？ 人数とか装備

とか」

「人数はその都度違う。

護衛代として商人が支払う金額に応じて変わるんだろう。

定期便になれば15、6人の護衛が付くのが通常だったが、恐らくそれが最大級だろう。

装備は至ってシンプルだが、剣、弓、槍と、それぞれの使い手が一通り揃っている」

「そうか、やはり傭兵となると手強いな・・・」

この後、ダウスがなにげなく放った一言が、事態を思わぬ方向へ転換させた。

「あと、俺が知っている事と言えば・・・、奴等の親玉がマンガステと呼ばれていたという事ぐらいか・・・」

「マ、マンガステですって!？」

それまで黙って聞いていたニートが、急に大声を張り上げてダウスの側へダダッと駆け寄ると、その胸倉を掴んだ。

「あんた今、マンガステって言ったわよね!」

「あ、ああ・・・(汗)」

驚くダウス。

ダウスの胸倉を掴むニートの手にはみるみる力が籠もって行き、目がどんどん血走っていく。

そこには怒りや憎しみといった感情が滲み出していた。

驚いたのはダウスだけではない、その場にいた誰もがニートの突然の豹変ぶりに驚いた。

タウが声を掛ける。

「どうしたニート、なにがあつた？」

ニートは眉間に皺を寄せて、険しい表情のまま小さく呟くように答えた。

「マンガステ・・・、義父さんの・・・トロイの部下に、そ

ういう名前の男がいたのよ・・・」

「なに？ それは本当か！？」

それでも、ニートの言葉を聞いてその意味が理解出来たのは事情を知るタウだけで、他の者は皆、訳も分からずに目をパチクリさせるだけだった。

そんな連中を余所に、ニートの次の行動は決まっていた。

ニートはダウスから手を放すと、無言のままずかど大股で部屋を出て行く。

訳の分らないヴィリーがニートの背中に向かって言う。

「おい！ どこ行くんだ、てめー！」

それにタウが答える。

「奴等を捕まえる。 すぐ出発するぞ！」

「なに！？ そうか！」

ヴィリーは再びの出陣に勢い付いた。

「バナールさん達はこの男を見張っていて下さい。

行くぞ、ヴィリー、アイヒ！」

峠に向かって馬車を走らせるタウ、その御者席の横にはニートが、いつになく厳しい表情でじっと前を見据えていた。

「何故・・・、トロイ・ベーレンシユタルクの部下がこんな所に居るんだ」

「知らないわよ、あたしに聞かれたって・・・」

「その、マングステという男は死んだのではなかったのか？」

ニートは俯いた。

「あの時・・・、義父さんが死んだ時、その部下の人達も殆ど一緒に死んだ・・・。」

でも、そのうち何人かは遺体が見つからなかった。行方不明になった人もみんな死亡扱いにしたのよ。

その一人がマンガステだった……」

「……軍人が夜盗化したという話はしばしば聞くが、それは戦時等の混乱期によく起こる事だ。」

どんな男なんだ、そのマンガステという男は」

「正直、名前を聞いても、顔も思い出せないわ。」

トロイの直属の部下じゃなかったみたいだし……」

「要するに、そのマンガステが、トロイが死んだ経緯を知っているという訳だな」

「裏切ったのよ」

「なに？ 裏切った？」

「トロイの遺体の傷は、背中から攻撃されて致命傷を負ったものだった。」

でもトロイは……、あの人は敵に後ろを取られるようなへまじゃないわ。」

後ろにいた味方に斬られたのよ、そうとしか考えられない」

「ではそのマンガステがトロイを斬ったと？」

「分からない……、でもそれに荷担していたのは間違いないわ」

「ワン！」

馬車の荷台でアイヒの横に寝そべっていたワンちゃんが、首をもたげて一声吠えたのは、それから暫くしてからだった。

するとタウ等の前方、道の向こう側から小さな点のように通商馬車が現れた。

ニートはすぐさま馬車を飛び降り、それに向かって走り出した。
ダダッ！

「ニート！ いきなり斬りつけるんじゃないぞ！」

果たしてタウの言葉は届いたかどうか、ニートは近付いて来る馬車に向かって道の真ん中で立ち止まり、大声で怒鳴る。

「マングステ！ マングステはいるか！」

その後方で、タウが馬車を止め、御者席の上に立って大きく手を振りながら合図を送る。

「おい！ 止まれー！」

気付いた通商馬車の御者が慌てて馬の手綱を引いた。

「どー！ どー！」 ヒヒヒン

その横に座っていた護衛の兵士その1が驚いて声を上げる。

「な、なんの騒ぎだ！？」

御者は立ち上がってニートとタウに向かって怒鳴り返した。

「こら！ お前達！、一体何のつもりだ！、これは王室御用商人モーシュ様の通商馬車と知っての狼藉か！」

「王室御用商人か、聞いて呆れる・・・」

余談だが、確かにモーシュという商人は、王都ヴォルストブッフで貴族相手に高級な海外製ドレスや礼服、宝飾品等を

売っている豪商の一人で、王室の関係者も利用したことはあるのだろうが、決して正式な免状を持った王室御用達の

出入り業者などではない。

ヴォルストブッフの住人、特にご婦人方であれば当然知っているべき情報であり、タウの妻もまた然り。

タウは独り言のように呟いて、鼻で笑った後、大声を張り上げた。
「俺は護衛連隊第7小隊長タウゲニヒツ・ラングヴァイラー軍曹だ！」

今からこのドロツセル峠に出没する山賊を捕縛する！

全員そのまま動かずにいてもらおう！」

「なに！？ さ、山賊だと？（汗）」

驚く御者、その横で脂汗をかく護衛の兵士その1。 ギクツ！
御者は言う。

「何を言っているんだお前は！ 山賊など何処にもおらんではな

いか！」

後続の通商馬車の御者達や従者達がざわざわと騒ぎ始める中、その馬車の周囲に展開していた護衛の兵士達が、続々と

前の方に集まってきた。

「何だ、何事だ！」

その声を聞いた兵士その1が、声の方へ向いて答える。

「お、マングステ、いや、あいつらが今から山賊を捕まえるとか何とか言いやがって・・・」

その言葉にニートがいち早く反応した。

「お前がマングステか！！」

それは、髭だらけの顔に吊り上がった太い眉とギョロリとした目つきの悪い悪人面で、背は高くないが恰幅がよく、

肩を揺すりながらこれ見よがしに偉そうな態度で歩く男だった。

そのマングステが低いしゃがれた声で言った。

「なんだ、小娘。あん？、てめえどつかで見覚えが・・・」

そして思い出す。

「！！・・・、そ、その赤い髪の毛は・・・、トロインとこの娘っ子！！（汗）」

「思い出したみたいね」

ニートはニヤリと薄笑いを浮かべながら、マングステに向かって刀を突き出した。 チャキ

タウが御者に言う。

「そこにいる、お前等の護衛について来た傭兵が山賊だ！

証拠は挙がってる、全員その場で武装を解除しろ！」

「な、なんだって！？（汗）」

仰天する御者の横で、脂汗をダラダラ流しながら兵士その1が、あからさまに怪しげに慌てふためいて叫んだ。

「て、てやんでえ！ お、俺達が山賊だとお？ ざけんなっ！

誰がそんなこと言いやがった！（汗）」

「よせ！」

マングステが止めた。

「こいつ等はみんなお見通しらしい・・・」

そしてニートを睨む。

「こうなっちまったら、ケリをつけなきゃならんだろうな・・・」

え？ トロイの娘っ子」 シャキン！（剣を抜く）

自分の過去を知るニートと出会ってしまった以上、このまま放置しておけば今後の仕事に差し障りが出るのは明白。

事ここに至っては、ニートもろとも全員を始末してしまおう、とマングステは考えた。

マングステの一言で、その思惑は一味の全員に伝わった。

「へっ、そうかい」

そう言つてニタリと笑つた兵士その1が剣を抜くと、他の兵士達も次々に剣を手に取つた。 シャキッ！

それを見たタウが命令する。

「ヴィリー！ 出番だ！」

「おうよ！ 待つてたぜ！」 ガバツ！

ヴィリーは馬車から飛び降りると、兵士達の中へ突進して行く。タウは続いてアイヒを呼ぶ。

「アイヒ、お前も好きにして構わんが、山は崩すなよ」

「ハッイ」

場面は一瞬にして怒号と悲鳴が駆け巡る戦場と化した。

ヴィリーはまるで水を得た魚のように、所狭しと駆け回りながら山賊達に斬り掛かつて行く。

前回のダウスの一味と違い、今度の相手はしっかりと武装している上に、訓練された元軍人達であるが、強い相手にこそヴィリーは燃える。

ヴィリーは自ら回転しながら、その勢いで装甲ごと敵の体を力づ

くで切り裂く。

次から次へと、正にぶった斬っていく。

ヴィリーが八面六臂の活躍を見せる一方で、アイヒもまたそれなりに奮闘していた。

本来のアイヒの力を持つてすれば、この場にいる全員を瞬時に殲滅する事さえ容易なだけの破壊的能力を持っている

のだが、タウから諄いくらいに戒められている上に、御者や従者等捕縛対象外の人達も多数入り乱れているため、

力の使い方に躊躇し模索しながらではあったが、徐々に新しい活用法を見出しつつあった。

それは、一人の山賊がアイヒの周りを守護していたワンちゃんの間をついて、アイヒに接近した時の事だった。

剣を片手に襲いかかる賊に対して、それを避けようとして体勢を崩したアイヒは、咄嗟に相手の体に右手を翳し、

「ブルート・・・コツヘン！」。

この術を受けた賊は、途端にその場に倒れ込んで血反吐を吐き、激しく叫び悶え苦しんだあげく、そのまま息絶えた。

ブルートコツヘン、その名の通り血液を煮沸するというこの恐るべき術は、本来アイヒが最も得意とする治癒系の

魔術を応用したもので、近接した敵に対して咄嗟に思いつきで反応してしまったものだった。

治癒系の魔術をパワーを増強させて攻撃に使うという、なんとも突飛な逆転の発想から生まれたこの術は、アイヒ

ならではの言うか、アイヒのような攻守両面においてその才能を遺憾なく発揮できる者のみが為し得る特別な魔術と

言えよう。

アイヒ自身、試しに使ってみたら上手くいった、といった感じで、

はじめは半ばキョトンとしていたが、“これは使える”と手応えを覚えると、みるみる力がこみ上げてきた。

そして今度は右手に力を集中させると、離れた敵に対してその拳を突き出す。 ビュッ！

「たいがーぱあんち！」

10m以上離れていたのに、直撃を喰らったその敵はものの見事に吹き飛ばされた。 ウギャーッ！

更に連打が続く。

「撃つべし！ 撃つべし！ 撃つべし！」 ビシュッ！ ビシュ

ッ！ ビシュッ！

バシッ！ ベキッ！ ボコッ！

見るも無惨な敵は、内蔵破裂に加え無数の骨折と頭蓋骨陥没で即死した。

アイヒは遂に、一個の対象に向かって力を凝集させて射出するコッを手に入れた。

そんな阿鼻叫喚の中で、一定の距離を置いて睨み合うニートとマングステ。

2人はじりじりと間合いを取りながら攻撃のタイミングを計っていた。

マングステがそろそろ動く、そう感じたニートが徐に声を発する。

「その前に、聞いておきたい事がある」

「なに？」

「トロイが死んだ時、お前はその場にいたはずだな」

「ああ、あの時か・・・覚えてないね」

空々しくニヤけるマングステ。

「ふざけるな！ ならば何故その後行方不明になって、今ここにいる！」

「俺がトロイを殺した、とも思っているのか？ 俺が奴を恨ん

でいたとでも」

「そんな事は関係ない！ お前が裏切ったのは間違いないんだから！」

「裏切っただと？、人聞きの悪い事を言うんじゃないやねえ。」

まあ、確かに虫の好かねえ野郎だったかな、清々したぜ」

「その言葉だけで十分だっ！」 ダダッ！

ニートは脱兎のごとく駆け出すと、一気に刀を振り抜く。 シュパッ！

マンガステはそれを平然とした顔つきで躲す・・・、しかし予想以上に鋭いその太刀筋に驚いた。

「へっ、やるじゃねえか、トロイの娘っ子」

ニヤリと笑うマンガステ。

「だが！」 ブン！ ガシッ！

マンガステが強力な一撃をニートに加え、ニートはすかさず刀の峰でそれを受けた。

が、その力の強さに圧倒され、後ろにふっ飛ばされた。 ブワッ

！ 「くっ！」

空中でなんとか体勢を整えたニートは、着地するなり再びマンガステに向かってダッシュ。 シュダッ！

パワーにはスピードで対抗、ニートは素早く移動して敵に狙いを定めさせないようにしながら、矢継ぎ早に刀を繰り返す。

マンガステはすんでのところでは隠し続けるが、次第にそのスピードに圧倒され始める。

そして遂に、ニートの一撃がマンガステを捉えた。 ピシッ！ 「ぐっ！」

マンガステの頬から一筋の血が滲み、流れ落ちる。 形勢はニートに傾いた。

ニートは、この時とばかりに一気呵成に攻め立てようとしたその時、それを見てタウが一声発した。

「殺すな、ニート！」

その声を聞いた一瞬、ニートの刀が鈍る。

マングステはその隙を見逃さなかった。

マングステは力づくで刀ごとニートを突き飛ばす。 ガッン！

そして間髪入れずに一撃を食らわす。 ガギッ！

「ギャーッ！」

飛び散る血飛沫。

間一髪で難を逃れたものの、ニートは肩のアーマーを砕かれ右腕に深傷を負ってしまった。

あまりの痛さにのたうち回る。

「ニート！！」

ニートがやられた！

タウはすぐにでもニートの加勢に駆け付けたかったが、彼もまた敵と交戦中のため自由に動けない。

下手に動けば自分の身も危うい。

「バカかてめえは、戦いの最中によそ見てんじゃねーよ」

マングステは剣を片手に持ち、肩を揺らしてふてぶてしい態度で、地べたに転がるニートを見下ろしながら言うが、

当のニートは痛みで目がかすんでしまつてよく見えない。

「そう言やあ、昔トロイの野郎が言つてたっけな、人を斬る時は躊躇うなっけな」

<人を斬る時は躊躇うな。

躊躇いは迷いを生み、剣を鈍らせ、その結果相手に要らぬ苦痛を与えるだけでなく、自分にも返ってくる>

確かにそれはトロイがニートに対して、事ある毎に教えてくれた剣士としての心構えの一つで、ニート自身もそれを

肝に銘じて生きてきたはずであった。

けっして忘れていたわけではない。

それをこの場で裏切り者のマングステに言われたことに、ニートは傷の痛み以上に耐え難い心の痛みを感じて、そのことの方が辛かった。

「てめえは教わらなかったのか、え？ このあばずれが！」

そう言つてマングステはニートの腹部を思いつきり蹴飛ばした。

ドカツ！

「あぐっ！」

それだけで、華奢なニートの体はいとも簡単に吹き飛ばされてしまふ。

その後何度も蹴り飛ばしながら勝ち誇つたようにベラベラしゃべるマングステ。

「やつは何も分かつちやいねえ・・・。

俺はいつでも躊躇つちやいねえ、ただ楽しんでただけだ。

手足を切り刻まれて苦しみ悶えて死んでいく人の様をな。

それをあの、トロイのクソ野郎が偉そうに説教なんぞたれやがって。 何様のつもりだつてんだ！

思い出しても胸くそ悪いわ！

英雄だか何だか知らねえが、背中がガラ空きだつてんだよ。

いいザマだったぜ、たいして強くもねえ口先だけのイカサマ剣士が」

一体何時のことを言っているのか、当人以外は皆目分らないが、この最後の一言がニートの逆鱗に触れた。

「貴つ・・・様・・・。」

ニートは右腕からボタボタと血を滴らせ、ボロボロになった体を引きずるようにフラフラしながら、痛みをこらえて

ゆっくりと立ち上がった。　はあはあ・・・

「そ、その汚い口で・・・、トロイを語るな・・・（汗）」

「あん？　なんだと？」

「貴様にトロイを語る資格はない！」

「ハン！　だったらてめえも切り刻んでやるよ！」

マンガステはその怪力でめいっばい剣を振り下ろす。　ブン！

今のニートでは直撃をくらったらひとたまりもない。

だが、この時のニートは恐ろしいほどの集中力を発揮した。

油断したマンガステの大振りのせいもあるうが、瞬時にマンガステの剣の動きを見切つて躲すと、痛めた右手に持つて

いた刀をサツと左手に持ち替えて下から掬い上げるように振り抜

く。　シュパッ！

ニートの間合いを見切つていたマンガステは、余裕でそれを躲した・・・つもりのはずが！。

「ぐえっ！」

奇声と共にマンガステの右腕がボトリと地に落ちた。

「な、何故だあー！！」

ニートの魔剣ヴィンデスアイルが彼女の気持ちに反応して火を吹いたのだが、マンガステには理解出来ない。

しかもニートは理解する暇すら与えなかった。　ズパッ！

まさに一瞬にして勝負は決した。

静かに刀を鞘に収めるニート、出血がひどく、もはや他の敵と戦う力もない。

そして

「タウ！」

ニートは地面に転がるマンガステの首を顧みることせず、タウ

の名を大声で呼ぶと、気付いてこっちを見たタウに
向かって、大きく親指を立てた左手を突き出してニツと笑った。

ニートが勝ったことを知ったタウは、目の前にいる賊達に向かつて声を張り上げた。

「お前等のボス、マングステは敗れた！

もうお前等に勝ち目はない！ 剣を捨てろ！」

タウの指差す先、地面に横たわるマングステの亡骸を見て、もうこれ以上の戦闘は意味がないと悟った賊達は、急速に意気消沈して次々に武器を置いた。

以外な程あっさりと。

いかにマングステがワンマンだったかが窺い知れる。

祭りの後のように雑然としてぐちゃぐちゃになった現場。

結局、武装解除に応じて捕縛された賊は6人、残り9人は全て小隊のメンバーによって殺された。

ニートが右腕に負った怪我は思いの外深く、傷は骨に達するまで斬り裂かれていた。

アイヒがその止血と傷口を塞ぐための細胞活性化の魔術を使って治療している。

それを側で見守るタウ。

タウの本音としては、首領のマングステは生かして捕縛したかった。

そしてその実態を明るみにした上で処罰を加えるのが、政治的問題に発展するのを回避するためには必要だと考えて

いたからだ。

だからと言ってニートを責めるつもりはない。

彼女には彼女の思いがあるし、やるべき事をやってのけた。

それこそ命懸けで。

それをどうして責められようか。

今はむしろ彼女を褒めてやりたいという気持ちの方が遙かに強かった。

そんなタウに、小綺麗なスーツを来た、小太りで、広い額のとっぺんまでテカテカした血色のいい肌艶の中年男が

近付いて来た。

見覚えのない顔だが、恐らく通商馬車のどこかに身を隠して事が治まるのを待っていたのだろう。

モーシュの代理人で運搬の責任者と名乗った男は、額の汗を拭き拭き、おどおどしながら質問した。

「こ、これは一体どういう事なのかね、ホファート子爵様より拝借した護衛の兵士を殺害し捕縛するとは……（汗）」

子爵様に何と申し開きすればよいのやら……（汗）」

タウは、いつものように平然とした顔で答える。

「我々は国王陛下の命により、山賊退治に来て任務を全うした。

その山賊がホファート子爵の傭兵だったとしても関係ない、山賊は山賊だ。

従ってこの事が、お前さんが懸念しているような政治問題に発展することはないと思って差し支えない」

全くもって根拠はなかったが、タウには自信を持ってそう答えるだけの確信に似たものがあつた。

「本当にそうなのかね……？（汗）」

「心配ない、もう山賊が出ることもないだろうし」

そこへ険悪な表情でニートが乗り出してきた。

「ちよつとあんた、モーシュの代理人って言ったわよね」

「そ、そうだが、なにか……（汗）」

「アイヒ！」

ニートは強い口調でアイヒを呼び寄せると、その背中のバッグをグイッと引つ張って男の前に差し出した。

「これあんたの店で買ったのよ、ニセモノじゃないの！」

どうしてくれんのよ！ お金返せ！」

「え？（汗）」

そ、そんな・・・、そ、そう急に言われましても・・・、私には何のことやら・・・（汗）

何かのお間違いでは・・・（汗）」

突然ニートに偽物を買ったと詰め寄られた代理人は、慌てふためいて、しどろもどろで話をはぐらかそうとする。

その広い額からは拭いても拭いても脂汗がダラダラ、明らかに拳動不審。

タウが面白半分で嫌みを言う。

「ほほう、お前の店ではコピー商品も売るのが、では王室御用商人とは名ばかりの偽りか？」

「そ、そんな滅相もない、コピー商品なんてそんな・・・（汗）」

「だったらこの場で積み荷を全部チェックしてあげましょうか！」

（怒）」

ニートの発言に男は青ざめた。

「そ、そんな事されたら納期に間に合わなくなってしまうですよ！（汗）」

わ、分かりました、分かりましたよ。

こちらの馬車の中にバッグがありますので、どれでもお一つお好きなものを差し上げますから、それで勘弁して

下さい（汗）」

「だってさアイヒ、好きなを選んでいいわよ」

「ハゝイ」

ニートに言われてゴソゴソと馬車に潜り込むアイヒ。それを見てヴィリーが茶化す。

「ははん、これじゃあどっちが山賊か分かりやしねーな（笑）」
「うっさい！ こっちは被害者なのよ！」

すぐにアイヒはひとつのバッグを手に馬車から顔を出す。

「あ、わたしこれがいいです」

「そ、それはヴェルトフレムト伯爵家のお嬢様の注文品！
い、いけません・・・、そ、それだけはお勘弁下さい・・・（汗）」

ニートが厳めしい目つきで男を睨む。

「は？ なんか言った？（怒）」

「あ・・・、い、いいえ・・・（汗）」

こうして山賊を全て退治した一行は、ギムペル村に引き返し歓待を受けた後、王都に向けて帰路についたのであった。

その道中、荷台でふんぞり返り、だらしない格好で高いびきをか
くヴィリーの横で、アイヒとワンちゃんと共に

じゃれ合うニートの笑顔は、これまで見たこともない程純粹で混
じり気のない、ありのままの素直な16歳の少女の
笑みだった。

今回の任務で彼女は、大きな壁を一つ乗り越えたようだ。

そしてアイヒもヴィリーも、それぞれに一回り成長したように見
える。

それは小隊に任務を完遂するという成果をもたらした、というこ
とで証明されるだろう。

そんな光景を見ながらタウは思った。

<家帰ったら女房の焼いたウナギを食おう・・・>

チャンチャン♪

後日談として、ダウスと、後に説得に応じて投降したその仲間達は、一時ブレートマン男爵領の牢獄に収監されたが、

南方郡裁判所の裁定により情状酌量が認められ、その後ブレートマン男爵家の使用人としてドロツセル峠に新設された

関所の番人に就いている。

この件に関して、バナール・ズースペクトの尽力があつたことは言うまでもない。

また、第7小隊に捕縛されたマングステの一味は、同じく牢獄に収監された後、同裁判所にて死刑の判決を受ける。

そして、事の仔細を聞いて欺されていたと知り激怒したホファート子爵の強い要望によってホファート子爵側に送還

され、国王とホファート子爵の名に於いて処刑された。

一方モーシユ商会は、本物に混せて模造品や贋作を売っていたことが広く知れ渡り、貴族達からの信頼を失うが、

さすがに商魂逞しく、中低所得者向けの商品や日用品等の輸入販売に転換して今なお王都で商売を続けている。

中でも南方から輸入したヤシの実洗剤は、一般家庭の主婦達から絶大な支持を受け、一躍大ヒット商品となったとか。

オハリ

第2部（後書き）

すいません、下手な文章で。

日本語って本当に難しいですね。

句読点ひとつ取っても四苦八苦です。

次はもう少しはまともなのが書けるといいな、と思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5908g/>

またまた護衛連隊第7小隊 - STAND ABLAZE -

2010年10月21日10時25分発行